
吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

【Nコード】

N1012Y

【作者名】

クロ

【あらすじ】

目が覚めたら出てきたのは、いかにも、という感じの神様。え？神になれって？・・・むしろ魔王？・・・そんなこんなでチートを引っ提げて魔法先生ネギま！の世界に武力介入！主人公（女）が欲望やら本能やらに忠実に好き勝手暴れまわるそんな物語。

『注意書き』

・本作品はチート転生モノです。主人公最凶です。戦闘で苦労とかしません。ご都合主義です。合言葉は「粉碎！玉砕！大喝采！」です。

- ・ ガールズラブ、ハーレム要素があります。
- ・ 原作主人公他に対するアンチ要素があります。
- ・ 原作ルートがブレイクされます

以上のような表現が嫌いな方は戻るを推奨します。

第1話 真っ白？神様？チート？テンプレです

「……………」

やあ皆さん。おはよう・こんにちは・こんばんは。しぎげんよう。

私はしがない小市民A（女）よ。

え？なんで名前を名乗らないって？

だって私、名前だけ記憶が無いのだから。ついでに体もない。

気が付いたら辺り一面真っ白な空間。

自分はふわふわ浮いた光の玉みたいになっていて。

あ、ちなみに動ける。現在進行形で飛んでいる。

ふう……これはあれね。

私の大好物である二次創作系の出だしね、わかります。

まあ、読むぶんには良いのよ？

ただね、実際自分がなってみると、やることはひとつ。

動きを止めて、すうっと大きく息を吸い込んで（肺どころか体無い
んだけど）

「「ゴゴゴ」……！私はだれ……！」

「ふう……酷い目にあつたわい」

そう言いながらイスに腰掛ける白い髪に白いお髭、白い服の如何にもなお爺ちゃん。

「神にダメージ与える一般人なんぞ、そうはいないぞ」

実は全身にダメージを負っている。

この光る玉、物理的ダメージ与えられるのね。

具体的には、某超野菜人の何番目かが「チョコになっちゃえ〜」でチョコになり、チョコにした相手をボコボコにした感じ。

さすがに喉は突き破ってないわよ？グロイし。

そんな訳で、部屋に入ってきた神様に開幕速攻で O H A N A S H I を発動させた私。

今は机を挟んで、対峙しています。

「それで、どういうことなのかしら？」

「ん？まあ、簡単に言つとじやな・・・お主、神にならんか？」

「・・・・・・・・そういうお誘いは、美人な女神様とかの方が私的には嬉しいのだけど。具体的には主神に仕える三女神とか。」

「いやいや・・・別に最終戦争起こすわけでもないし起こつてもおらんから。当代の天界の主・ゼウス様と魔界の主サタン様、親友じやから」

ちよ、え？親友つてなにそれ。天国と地獄・・・じゃなくて魔界つてもっとも相容れない存在じゃないの？

「天界は理性を徳として、魔界は本能を徳とする。それだけじやよ」

「・・・・・・・・ナチュラルに思考を読まないでちょうだい」

「それでも神での・・・というよりお主、思ったほど取り乱さないの」

「何を白々しい。記憶の欠落、体を改造？までしておいて。大方話をしやすいように、理解力やらも手を加えているのでは？」

「本当に恐ろしい奴じやな」

「それで？神になるとは、どういうことなのかしら？」

「うむ、この世には天界と魔界が1つずつ存在する。それぞれを絶対神・ゼウス様と大魔王・サタン様が治められていて、その下にワシの様な神や、魔王が存在する。その更に下が天使や悪魔じゃな」
魔王が複数つて・・・世の中の勇者様？泣いちゃうよ？

「そして神や魔王が管理する人間界が数限りなく存在する。そなたら人間の言葉でいえば、並行世界、パラレルワールド、外史などじゃな」

本当にあるのね、並行世界。これは神様に頭弄って冷静でいられるようにしてもらって正解ね。ご都合主義感謝。

「最近、その人間界の数が急速に増加し、神や魔王の手に余る事態が生じてきたのじゃ」

「それで私を神に？というか神ってそんなに簡単になれるものなの？」

「普通は無理じゃ。そもそも天使や悪魔は、人間が輪廻の間に魂を鍛えてなるんじゃ。これだけで軽く500年。まあ人生5回転生したらなれるかも？くらいじゃな。その後、より多くの時間を賭けて神や魔王にレベルアップ・・・というのが基本の流れじゃ」

その間にも新しい世界・新しい命・新しい魂が生まれるから、天使や悪魔が増えても普通の人間が減る事はない、と。それにしても、無から有を生み出しまくってない？真理に喧嘩売ってない？あの黒いによるによる出てきちゃうよ？

「ところが極希に、突然変異していきなり神や魔王クラスの格を得る魂があるんじゃない。それがお主じゃ」

おおっと。眠りについた神や魔王の魂とかそんな流れすらぶった切ったよ私の魂。突然変異っておい。

「まあ、人手不足に加えて私がそれを手伝う資格があるのは分かったわ。それで具体的には何をさせたいの？」

「最初の数回は人間界の1つに行ってもらおう。そこで管理者として物語の終わりまでを見届けてもらう。慣れてきたら複数の世界を管理してもらうことになるじゃろ」

「物語？」

「世界、つまり人間界には何かしらの目的、物語がある。お主のよく知る二次創作のように、原作を物語にしていたり、お主の居た世界のように科学技術が発展しすぎて最終的には人類自滅・・・という物語もあるの」

おい！自滅って！ただの滅亡よりたち悪い！人類自重しろ！核？核なの？

「まあ実際には、静観し事態の推移、物語をただ眺めるもよし。一部の例外を除けば、積極的に介入して原作ブレイクをするもよしじやよ」

「自由なのね」

「管理者のスタイルはそれぞれに委ねられておる。必要なのはどん

な形であれ物語を進める事。世界が増え続けると最終的に全部混ぜたり合って消えてなくなるからのう」

「・・・なんかとんでもないこと聞いた気がするけど流すわね。それより質問んだけど、天使や悪魔になる条件って？」

「生前に理性と本能、どちらを優先させたかじゃな。理性ならば善を積み天使に近くなり、本能ならば悪を積み悪魔に近くなる。そのまま何回も転生すると天使や悪魔になる。まあ、ここでの善悪は一義的ではない。悪といっても犯罪行為から色欲・強欲などまでピンキリじゃよ」

「・・・私の性格やら性癖的に魔王の方がいいんじゃないかしら？」

「それなら心配ない。今のお主は、魂の格は手に入れたが善悪どちらにも染まっておらん。数回管理を続けるうちにどちらかに染まるじゃろ。その結果悪に染まるなら魔王として魔界で暮らすことになるう。」

「あれ、いいの？というか魔界ってどんなところよ？」

「わしらにしたら管理者が増えればそれだけ負担が減るのでな。神であろうと魔王であろうと関係は無いのじゃ。天界と魔界の関係も良好じゃしの。魔界も、犯罪を犯した者の転生先としては文字通り地獄じゃが、色欲程度ならむしろ願ったりかなったりじゃないかの？」

「・・・何だか、都合の良い想像をしてしまったのだけど」

「生前色欲の強かった者なら、その魂は大抵夢魔の下へ送られるの。」

そこで毎夜くんずぼぐれつ・・・」

「さあ！きりきり話を進めましょうか！」

「お主、存外分かりやすいのう。まあ魔界の方には女の色欲系魂が多く行きそうだと言っておこうかの」

「ちょっと！確かに私は自称真性のレズビアンでドのつくサディストだけでも、とつかえひつかえなんかしないわよ！」

「少しはオブラートに包むとかしないのかの？というか自称？」

「別に隠すほど恥ずかしい事じゃないもの。まあ変わっているとはよく言われるから認識はしてるけど。自称はまあ、本気でその道進む人には鼻で笑われるような・・・あくまで一般人基準での、という意味を込めてよ」

「まあそれはそれとして・・・女だらけの孤児院で育ち、女子高・女子大出身。先輩・後輩・同学年問わず多くの女生徒を跪かせ、視線を向けるだけで相手の頬を染めさせ可愛がる様についたあだ名が女帝。もっとも多感で排他的・危険な中学時代は、苛められる前に多くの女生徒どころか女教師までも味方に取り込み逆に付け込もうとした男子を言論で封殺。クラスを掌握後学年、学校全体まで手を広げる・・・まだ続けるかの？」

「ちょっと誤解を招く言い方じゃない？確かにちょっとハーレムっぽいことはしてたけど、本当の本気で関係を結んだ子はごく一部よ？全員等しく最大限に愛したしね」

「まあ確かにの。その辺で歪んでおれば、いくら格を持っているか

らと言って神になどせんよ。現にお主と関係を持っていた者も順調に幸せになっておるしの。お主と関係を持っていた者の中で、初めて男と結婚する者が出た時は内心かなり複雑だったようじゃがな」

「それはそれ、これはこれ、よ」

「ふむ、まあよい。なんだか色々話も逸れたし、途中受ける前提で進めてしまったがどうじゃ？この話、受けてくれるかの？」

そう言いまっすぐ視線を向ける目の前の一見お爺さんは、しかしその実素人の私でもわかるオーラを身に纏っている。

だからこそ、先ほどの色ボケ会話と思考を切り離し冷静に考える。

「最後に2つ質問。元の世界と私の関係がどうなるか。それと何故名前の記憶を封じたか」

「元の世界のお主の存在は抹消される。元から居なかったことになる。お主と関係があった人間については、現状に一番合った状況に世界が勝手に修正する。男の恋人がいたり、独り身ならそういった関係が元から無かったことになり、同姓のパートナーがいるなら条件にマッチしたお主の代わりとなる存在と関係を持っていた、などじゃな。名前はその存在をもっともよく表す。お主が名前を覚えているとこの世界に留めるのが難しくなるのじゃ」

打てば響くように返ってくる答え。

正直この時点で現実世界への未練は殆どない。

孤児院育ちのため肉親その他が居ない。

お世話になった孤児院ともしばらく連絡を取っていない。

同じく学生時代関係を持っていた子たちとも卒業を共に疎遠になっている。

社会人半年で分かった風な口を聞くなと怒られるかもしれないが、この先数年、数十年、仕事を覚えてしまえば単調な、平凡な一市民としての生活が待っている。

さっきの色ボケ会話も大部分魅かれるものがあるが、それを抜きにしても好んで読んでいた二次創作ものの展開。

そういえば……

「こういつた展開なら、神様からなにかしらの能力がもらえたりするのかしら？」

「もちろんじゃ。世界の管理者となるからには何であれ力を持たねばならぬからな。ついでに言つとよくある制限などもない。お主の望む能力を望むだけ与えよう。加えて不老不死はデフォルトじゃ。」

気前の良いことだと感心する。

そこで一旦心を落ち着けて、もう一度話を精査する。

そうして心を決めると、意識を神に向けはつきりと宣言する。

「その話、受けるわ」

「ふむ・・・まずはありがとう、と言っておこうかの」

「気にしないで。私にとっても刺激的な生活という意味で利のある話よ」

「それではさっそく与える力について話し合おうかの。まずは姿と名前じゃな」

姿と名前・・・不老不死、言うなればこれから永遠に等しき付き合いになる・・・慎重に選ばないと。

と言っても候補はすでにある・・・最初の姿がこの光球の時点で姿を変えるのは予想出来ていたし。

と思っっていたら・・・

「まあある程度神として力を付ければ、姿を変えることも出来るんじゃないがな。それでも世界に入り物語を完結させるなら早くて数年、下手すれば数百年もありうるのではな」

あっさり変えられる宣言。さすが神。そう言えば・・・

「まだ、どんな世界に送られるか聞いてなかったわね」

「ん？ああ、そうじゃったな。最初に行ってもらったのは『魔法先生ネギま』……のような世界じゃ」

……？のような世界？

「ずいぶん曖昧な表現ね」

「うむ、いくつかの要因が混ざり合った結果、原作にある事が無かったり、逆に無い事があったりするようじゃな。お主、原作知識は持つとるか？」

「いいえ、アニメと二次創作関連で調べた知識だけね。原作自体は読んだこと無いわ」

「ふむ、能力として授けることも出来るが？」

「……いいえ、いらないわ。別段そこまで知りたいとも思わないし。知らないなら知らないで楽しめるしね」

「そうか……して、どうする？」

「決めたわ。小説『レイン』シリーズのシルヴィア・ローゼンバークの容姿にして頂戴。ただし、原作は15〜6歳風の美少女だったから、私の年齢22歳相当の美女に、具体的には身長やスリーサイズを引き上げて頂戴。名前はそのままシルヴィアで。」

「お主……本当に欲望に忠実じゃな」

「当たり前じゃない、貰えるものは貰う主義だのも。本当は某4丁拳銃で天使狩りする魔女や、帝国の蒼き魔女、1000年生きた大召喚士様なんかと迷ったのだけれどね。」

「まあ、お主の性癖には4人ともぴったりじゃがな」

迷った3人だと、全身ラバー・軍服・ほぼ下着姿が一番マッチするのが最大の障害ね。軍服はまだ違和感少ないけれど。普段着から苦労する。

それにこの3人だと可愛い服装が難しいという難点があるし。

何よりネギまの世界に魔法使いならキャラ的にぴったりでしょ。

生き様も素敵で憧れるしね。

個人的意見から言えば是非レインとくっついて欲しいと思う。

「その年でまだ可愛いを・・・あだっ」

神様・・・年齢は関係ないのよ。

女の理想はいつでも可愛く美しく！

不適切な発言の神様にはチョコアタックをお見舞いよ。

「いたた、まったく・・・ほれ」

神様が手をかざすと、一瞬光で視界が塞がる。

視力が戻ると目の前には大きな鏡があり、そこにはバスローブに身を包んだ100人いれば100人が同姓・異性問わず美人と答えるだろう人が映っていた。

バスローブを脱ぎ、近づいてよく観察する。

豊かな銀髪はまっすぐに下され、腰まで届き艶やかに光る。

身長は女性にしては大きい方かな。おおよそ170cmくらい。

大きな瞳はサファイアブルー。ここは原作と違うが、大人びた風貌によくマッチしている。

顔の造形は原作通り、神が作った彫刻のように整っている。

全体的に見ても、原作のシルヴィアを成長させればこうなるだろうことは容易に想像できる完成度だ。

次に視点を下げて首や胸元、手や腕に向ける。

キメの細やかな、健康的な白い肌。

肌触りがシルクのような・・・というのはこういう肌を言うのだと実感。

ぺたぺたと肌を撫でながら、両手は大きく膨らむ女性の象徴へ。

「・・・んっ」

現実世界・・・もう神になる事を選択した私にとって前世よりも大きな胸を、自分の胸でありながら少々羨ましげに揉む。

感度の良さに危くスイッチが入ってしまいそうになるがここは自重。推定Eカップの胸は私的理想のと真ん中。

大きいだけでなく大きすぎず、指が沈む。柔らかいのに張りがある。

女の身でありながら常々疑問に思っていた矛盾。正しく人体の神秘。肌の細かさと相まって、触る分にもとても気持ちいい。

特に自分にこう言った女体特有の柔らかさを持たない男性が胸を重視するのも分かる気がする。

そのまま視線を下に向ける。

きゅっと引き締まったウエストにほどよく突き出したヒップ。

引き締まった太ももから続く長い脚線美は、高い腰の位置も相まって鏡の前で回り後ろから眺めても綺麗な一言。

全身のチェックを終えバスローブを着こむと、音に気付き、脱いだ辺りから後ろを向いていた神様が振り返る。

「どっじゃった？」

「最高の出来よ。さすが神様」

「それは重畳。それにしてもお主、羞恥心は無いのか？」

「神様ならその手の欲は少ないのでしょ？それにこれだけ綺麗だと気にならない・・・というか見せびらかしたいという思いが出てくるわね。ナルシストの人ってこういう気分なのかしら」

「一応男の目にさらしても気にならないのか？」

「あれ、言ってなかったっけ？私は確かにレズビアンだけでも、別に男嫌いってわけじゃないもの。興味が無いだけで。だから別に見られても気にしないわ。まあ、この先も男を好きになる事はないでしょうけど。だから自称・真性なのよ。」

「なるほどの。まあ、満足してもらえたならよいが。次はどうするか」

肉体を得た私は神様に向かうようにイスに腰掛け、目の前に現れた紅茶を飲んで思考を回転させる。

「そうね・・・まずは手堅くステータスマAXで行きましょう。肉体的・精神的全能力を上げて頂戴」

「本当に容赦ないの・・・」

「私の好きな言葉・・・粉碎！玉碎！大喝采！だから」

「・・・もう何も言わん・・・ほれ」

神様がまた手をかざし体が光る。しかし今度は目に見えて変化が無い。

しかし立ち上がり体を動かすと変化は一目瞭然。

軽く走ってみたり、飛んでみる。手近なものでイスを掴み振り回してみる。まるで小枝のように振り回す事が出来る。

頭の回転も早くなった気がする。体を動かすのと同時に状況判断なども多角的に行える。

「すごいわね・・・具体的なスペックはどうなのかしら？」

「そうさの・・・肉体的には大抵の世界で最強種に認定されている龍族の中でも、更に強い古龍種を片手で屠れるのう。神候補の不老不死に加えて超再生、首を落とされても心臓を貫かれても次の瞬間には再生するぞ。まあ、そもそも体を上手く使えるようになれば、硬化で攻撃が通らなくなるがな。精神的、頭脳的に言えば、MITの首席が赤ん坊に思えるくらいの能力かの」

「・・・へえ、さすが神様」

龍族を片手つて・・・それにMIT、マサチューセッツ工科大学の首席つて言ったら、おおよそ世界でもっとも頭が良い人つてことにならなない？厳密には違う場合もあるのかもしれないけれど、それでも世界で十指には入るわよね・・・。IQ換算？250くらいだつて

まあ、貰えるものは貰う。うん、次ね。

ネギまの世界なら、気と魔力ね。

「気と魔力の総量、それを完全に扱う事の出来る才能、あらゆる技

術を短期間で効率よく習得できる才能を頂戴。後は前世の世界の一般知識を一通り。」

「ふむ・・・ほれ。総量はエネルギー換算で地球5つ分。才能と一般知識だけでいいのか？このままじゃと、技術が無いから、下地がすごいだけの一般人じゃぞ？」

「序盤はチート能力ごり押しで生き残り、その間に自分で身につけるわ。こればかりは自分で学ばないと本当の意味で使いこなせないし。何よりーから学ぶのも楽しそうだしね。」

「ほう・・・他にはないのか」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの不老不死を何とかする方法」

「・・・残念ながらそれは無理じゃ」

制限無しと言っておきながら無理・・・という事は

「それが一部の例外ということかしら」

「そうじゃ、原作がある世界では、開始時点で登場人物が絶対に揃わない状況に陥ると世界が崩壊する」

「それじゃあ、たまにあるアリカを寝とって薬味が生まれえない状況を作ると？」

「またコアな設定じゃな、しかも女の身で寝とるって・・・まあ崩壊するな」

重要なのは、登場人物が揃う事。それなら状態は関係ない？

「彼女の不老を一時的にでも抑える方法は？」

「それならあるが・・・」

「じゃあそれを頂戴。女にとって、いつまでも成長しないってのはきついもの。お洒落も出来ないし」

「よかるう。方法は向こうに行つてすぐ、魔法を学んだときに入手できるよう手配する。」

「それじゃあ、最後に一つ」

言葉を区切ると一旦目を閉じ深呼吸。

最後の迷いを捨てると、正面の神様を見つめはっきり告げる。

「殺しの覚悟を得る手段」

「ほう・・・」

「神様ならちよつとの時間が1000年位になる部屋とかあるでしょう？猫の姿をした神様の部屋のな。貸して頂戴」

「あるにはあるが・・・急じゃのう」

「どうせこれから色々な世界に行くのなら遅かれ早かれ殺しは経験するでしょう。さっきので分かっていると思うけど、私は1400

年ごろの地点から介入するから」

「ハイ・デイルイトウォーカー吸血鬼の真祖と共に、か」

「ええ、だから殺しも出来るようになっておく必要があるの。技術はともかく・・・心が折れないように」

「・・・よろう。その扉から進むといい」

そうして神様が手をかざすとどこからともなく扉が現れる。

そして私の服装も、全身をぴったりと包むウエットスーツの様な格好に。

手には両刃の長剣。

「ありがとうございます。とりあえず1000年位籠ってみるわ」

「ああ・・・」

言葉少なな神様を安心させるように微笑むと、扉を開ける。

そうして私は新たな、刺激的な生活に繋がる一步を踏み出した。

第2話 神様特製装備ーやりすぎ？なにそれおいしいの？（前書き）

前回のあらすじ

神様と会話

並行世界の管理者となることに

チートをたくさんもらう

第2話 神様特製装備！やりすぎ？なにそれおいしいの？

皆さんごきげんよう、小市民A改めシルヴィアよ。

神様に拉致され、なんやかんやで神（魔王）候補になってチートバグキャラになったどこにでもいる女よ。

今は神様特製、精神 時の部屋で1000年耐久殺し殺されまショーを終えて出てきたところ。

最初の部屋に戻ると神様はいなくて、机の上には紅茶。

私的には日本茶の方が好きなのだけれどこれからの事を考えると紅茶も飲めなきやいけなしね。神様製らしく飲みやすくしておいしいし。

とりあえずイスに腰掛け、一息つく。

神様は案外鬼畜だった。

魔界に送られるような犯罪者の魂を呼び寄せて人の形に戻した。

私はそれを・・・斬った。

体感時間でおよそ1000年、それでも決して忘れず、殺しに慣れることは無かった自分の人間性にすこし安心。

それでももう、殺すことに躊躇はしない。後悔もしない。

私は私のために殺した存在を受け入れ、背負い、歩んでいく。

その覚悟を持つことが出来た。

部屋に籠った最初のころは酷かった。

当然と言えば当然、神候補になろうと、元はただの人間。

特に人を斬ると言う非日常の行動。それを成すには強い動機が必要だ。

それが無いまま、深く考えないまま必要だからと部屋に入ってしまった。

1人殺し、うろたえて嘔吐している間に他の魂に殺される。

痛みに苦しみ、逃れるために反撃。

そんな狂乱の中、散り散りになった思考で考えていた。

刺激的な生活を欲して話を受けた。ではその生活の中で私はなにが

したいのか？

殺し殺され、出した答え。

それはとても人間的だと思えるもの。傲慢・・・とも言えるかしら。

『私は、私と私の大切な者のために生きる。そのために力を行使する』

当然と言えば当然の、結局はそんなものだった。

神であれ魔王であれ、管理者として世界を渡り、物語に介入し見届ける。

そんな私の行動指針は私の好きなように生きると言う事。

気に入った者と楽しく過ごし、邪魔する者は叩き潰す。

手の届く範囲の大切な者を守り、それに仇成す者を捻り潰す。

気にいらぬ者は放置する。協力も助けもしない。生きようが死のうが私には関係ない。

私は正義の味方ではないし、無関係な人のために行動なんかしない。

1人の大切な存在と、1000人の無関係な存在。どちらかしか助けられないなら、私は迷わず1人の大切な存在を助ける。

力のある者は多くのものを助けなければならぬ？そんなのはごめんよ。

その存在を気に入るかどうかは私基準。

人であれ、物であれ、あるいは概念的な存在、組織や社会・国などもあるかもしれない。

何であれ、気にいったのなら最大限力を使い助け守り協力し、気にいらなければあっさり斬り捨てる。

私は私と、私が大切だと思つる者のためにのみ力を使う。

力を持つ者の傲慢・・・排他的・・・いくらでも出てきそうね。

それでも構わない。それが私の生き方。私の覚悟。

やっぱり魔王寄りかなと苦笑しながら後ろの存在に声をかける。

「そんな感じで行こうかと思つただけねど、どうかしら？」

「そんな感じで行こうかと思つただけねど、どうかしら？」

「ふむ、まあよいのではないか？」

久しぶりに会った神様が目の前に座る。

「一応気配を断っておったのじゃが、良く気付いたの」

「それはもう、100年も鍛えればね」

そう、鍛えたのだ。

実際殺しの覚悟を固めて、体に染み込ませるのは最初の10年くらいで済んだと思う。

それじゃあ後の90年何をしてたかというところ、一言でいえば鍛錬。

一言でいえばチート鍛錬。

部屋の特性で体力は減らない・眠くならない・お腹も減らない。

そんな中で次々出てくる相手に戦い続けた。

最初は呼んだ魂の、つまりは普通の人々が相手だった。

それがいつしか魔物になり、さらには天使や魔族になっていた。

ちなみに魔物は、知性の低いモンスターを指す。

簡単に言えばゴブ　ンやス　ィムだ。

その上位者が魔族。高い知性を持つ存在。原作だとヘルマンとか言

ったのがこれに当たる。

この2つを合わせて悪魔という。その上が魔王。

部屋の作った仮初の存在なので、自我や命といった意味では存在していない。

それでも魔族、それも夢魔の綺麗なお姉さんが出てきたときは神様を少し恨みつつ泣く泣く斬り伏せた。

そんなこんなで100年も戦えば、自然と技術も鍛えられる。

具体的には体の使い方や気の扱いなどだ。

お蔭で気を全身に巡らせて強化したり、気弾を放つことも出来るようになった。

我流で剣術もそれなりに。途中から日本刀に変え、文字通り『斬る』ことを重視した。

西洋の剣は力に任せて叩き斬る、が基本だったから。

「そうだ、忘れる前に言つとかなきゃ。1つ追加で欲しい能力が出来るたの」

「何じゃ、まだあつたのか？」

「魔眼が欲しいのよ。能力は分析・解析特化型」

「何じゃ。直死の魔眼やら絶対遵守の王の力でも望むかと思つたの

に」

「その辺は自分の手で直接するからこそ楽しいのよ？」

につこり微笑んだというのに、神様は視線をそらした。あ、一応言つとくと従わせるって意味でよ？殺して喜ぶ変態さんにはなっていないから。可愛い子を跪かせるなら自らの力でじわりじわりと墮としていくのが・・・ね。

「ワシはなにも言わんぞ、ほれ」

「神様の対応が冷たいわね・・・ん、ありがとう」

神様が手をかざすと一瞬目のあたりが熱くなる。恐らく変化したのだろう。

「魔力を集中させれば発動じゃ。発動中は眼の色が深紅に染まるぞ」

「わかったわ。・・・さて、そろそろ行こうかしら」

「そうか・・・持ち物や装備はどうする？」

神様の言葉にふと考える。

今は部屋に入るときと同じくウェットスーツに無銘の日本刀

「うゝん、神様に任せるわ。どんなものが来るか楽しめるし。向こうで目覚めたら持っている状態にしてちょうだい」

「なんでもいいが1番困るんじゃないの。まあよいわ、任せておけ。

ほれ」

神様が手をかざすと机の横に大きな光球が現れる。

「それがお主の行く世界じゃ。触れれば入る事が出来る。時代は1400年ごろ、原作登場人物の1人、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの住んでいた城の近く、状況は彼女が吸血鬼の真祖ハイ・テイライトウォーカーにされてから1週間というところじゃな」

神様の説明を聞き納得すると立ち上がる。

「それじゃあ、行ってくるわ」

「ああ、達者での」

短い会話を終わらせると、最後に神様に頷き、光球に触れる。

視界が光で満たされる。

さあ、それじゃあ私の新たな物語をはじめましょうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目を覚ますと目の前には綺麗な小川が流れ、向こう側と自分の後ろには森が広がる。

そんな森の脇の草っぱらの上で目を覚ました。

気を巡らし周囲を確認。

付近に獣や人の気配はしない・・・とりあえず安心ね。

それじゃあさっそく装備の確認をしようかと立ち上がり、視線を自分に向け。

まず履いているのは膝下ぐらいのロングブーツ。

きつ過ぎず緩すぎず、しっかりとした作りのオーダーメイドかと思えるぐらいのぴったりサイズ。

ヒールは無いぺたんとしたタイプ。まあ、これからしばらくは歩きが基本なのだからこれでいい。

上にブラウス、下にショートパンツは原作通り。違うのはベルトをしていたこと。

ただショートパンツが思ったより短くて、お尻が少し出るかどうかのホットパンツレベルなのはどうなのか。

まあ、分類上どちらもショートパンツなんだとか細かい話は置いていて。

それに実際の所、きわどい短さのホットパンツから延びる引き締まった脚は我ながらカッコいいと思う。

・・・やっぱりナルシストの気が、ゲフンゲフン

次に地面に置いてあるロープ。

まあロープといっても、袖あり、前開き、フード付き、腰丈の・・・むしるパーカー？と思わないでもない。

でもロープ。ロープと言ったらロープ。なぜなら魔法使いの正装はロープと決まってるから（ドーン）

最後にマント。これは膝下くらいまで覆う、完全に外套としてのマント。フード付き袖なし胸元でボタン止め。

そんなこんなで見た目の確認は終了。ちなみにロープ以外はみんな黒。

ロープは黒地に赤と金で飾りつけられている。

ロープも着こむと全体的に品の良い感じでかなり好印象。神様グッズヨブ。

・・・ただしちらりと覗いた下着は上下とも高級店にありそうなセクシーな赤だった。私の好み丸わかりですね、わかります。

マントはとりあえず脇に置いておく。

一通り眺めると、今度は意識を体に向けて集中。

お臍の下あたりにある、気の集積地・丹田。

ほぼ同じ位置にあるのを感じる魔力に意識を集中。気と同じ要領で魔力の通り道を通し全身に魔力を行きわたらせる。

最初の数分はまったく動かなかったが、次第に微量ながら流れだす。

今はこれでいいと、そのまま目にだけ集中する。

魔眼の発動を感じる。そのまま視界を動かすと、意識したものについての情報がどンドン表れる。

優秀なのは何でもかんでも情報が表れ氾濫する訳ではないと言う事。あくまで意識したもの、あるいは意識の上で特定したものに限られるようだ。

そんな訳でもう一度身に付けているものを眺めてみる。

まずはブーツ。

オートリジエネ
自動体力回復魔法・オートヘイスト
自動加速魔法・オートクリーン
自動清潔魔法・オートリペア
自動修復魔法が
付与。

・・・壊れず常に清潔、どンドン回復いくらでも歩けます（加速付き）ってことよね。

ホットパンツにブラウス、下着も見てみる。

オートクリーン
自動清潔魔法・自動修復魔法が付与

・・・手荒に扱っても破れない、おまけに洗濯いらずで常に清潔つてことね。

ローブも見てみる。

オートプロテス
自動物理防御魔法・オートンセル
自動魔法防御魔法・オートリジェネ
自動体力回復魔法・自動魔力回復魔法・オートクリン
自動修復魔法・オートリペア
自動環境快適魔法の付与。

・・・これ1着で鉄壁防御！どんな環境でも生きていけます！快適性も保障！

・・・まあいいか。便利だし。

最後にマント。

オートプロテス
自動物理防御魔法・オートシエル
自動魔法防御魔法・オートリジェネ
自動体力回復魔法・自動魔力回復魔法・オートクリン
自動修復魔法・オートリペア
自動環境快適魔法・オートホルド
自動収納魔法が付与

これ、ローブと一緒にじゃない？と思ったのだけれど全然違う。

外側はマントの自動防御魔法を越えた先にはローブの自動防御魔法が展開・・・という事よね。

オートホルド
自動収納魔法は、マントの内側に押し当てると勝手に収納されるようだ。マントの裏地がゲートになっている。倉庫みたい。

そんな訳でちょっとやりすぎた？いやいや便利は偉いと内心ホクホクしながら次に視線を向ける。

次は草っぱらに寝転んでいた私の右におかれていた武器2つ。

1つは杖。

全長は150cmくらい。立った私の目線の高さに先端が届くくらいだ。

片手で握れるくらいの太さで先端から20cmくらいが少し太くなり六角形になっている。

その六角形が台座となり、その上に6つの爪で固定された拳サイズの水晶が付いている。

台座部分には2匹の蛇が逆方向に絡まり、螺旋を描いて上って行き、台座の両横に頭を付ける意匠が施してある。

・・・この後の展開がなんとなく読めそうだと思いつつ魔眼で解析。

名称『ヘルメスの杖』能力：自動魔力回復魔法付与・魔力伝達効率強化・魔力集束効率強化・魔力拡散効率強化・耐久力強化

うん・・・あれだね。ケリュケイオンとか呼ばれることもある、ギリシア神話の伝令の神、ヘルメスが持つ杖ですね。わかります。

というか、ゼウスがいるならヘルメスもいるんじゃないの？怒られないの？とか心配になる。

それにこの杖、2匹の蛇が絡まり上る様が、光と闇・善と悪・天と地・太陽と月・男と女・陰と陽なんかの二面性を表すとかじゃなかったっけ？

女の身で女を愛する私としては持ち主として杖に喧嘩売ってない？いや、二面性の統合という意味ではむしろ合っているのかしら？

……これ以上はやめておきましょう。能力的に便利で強そうなのは事実だし。

それにしてもスタートから伝説級武器装備か。さすが神様。さすが私。

更に解析すると、魔力を流して念じると30cmサイズの短杖に変化することも出来るようで、変化させて右の腰のベルトに差す。

もう1つの武器は、特徴的な反りをもつ短刀。

刀身も30cmほどで鍔がない。ナイフ代わりに使えそう……
・そんなことを考えていた時期が私にもありました。

名称『妖刀正宗』能力：自動体力回復魔法付与・切れ味強化・耐久力強化

……日本刀の弱点に真つ向から喧嘩売っているわね。折れず・曲がらず・欠けずの耐久力強化に加えて切れ味強化のフルコンボ。

おまけにこれも杖と同じく魔力を流すと形状が変化したわ。

刀身60cmほどの日本刀タイプと、刀身90cmほどの大太刀タイプに。

・・・大太刀をみて、某片翼の天使を思い出した私は悪くない。

あのキャラクターは好きだもの。左肩からまっすぐ切っ先を向けて構えればいいのかしら？

まあ便利だからいいけど、と切り替え短刀に戻して此方は左腰のベルトに差す。

杖も短刀も色は黒・・・変化が無いとか言わないように。

まあ、黒は好きだし構わない。

最後に寝転んでいた地面の左側に残ったリュックも黒よ。

かなり小さいタイプ、何が入っているのか開けてみる。

・・・うん、だってこの物語チートだもの。

そう思いつつ中を見聞。

入っていたのは松明にランプ、金物の鍋や食器、水筒にタオルや火打石、釣竿など旅の必需品がごろごろ。

水筒は竹製の小さめのモノが6本。あんまり入らないかと思ったら魔法で中身無限になっていた。味は普通の水とレモン風味にオレンジジュース。

何故6本とか思ったけれどもこの後の展開を考えてですね、わかりません。ご都合主義万歳、グツジョブ神様。

小分けにされたいいくつかの袋。1つには今私が来ている服装が3セット入っていた。一応予備？たぶん使う機会無いよと思った私は悪くない。

もう1つの袋には下着がたくさん。もう1つは食糧が少々、もう1つは空だった。

最後に手のひらサイズのお財布。中には数枚の金貨。この時代ならかなりの値打ちかな。

とりあえず財布をローブのポケットに入れておく。

リュックの小分けの袋、財布の容量キャパシティは無限になっていた。

もうなんでもありません、はい。

リュックの中身の最後は、1冊の大きな本。

中身を覗くと驚きの内容。

流し読みしただけでも、この世界に存在するあらゆる魔法についての記述がしてある魔導書だった。

これを読んで学べば魔法関連の技術は問題無さそう。

確かに、エヴァンジェリンと2人で旅することが出来るようになって

たとしても、独学じゃ難しいところもあるしね。

確か原作だと10年かけて闇の魔法を開発したりしたんだっけ。

ばらばらめくると、神様に頼んでおいた彼女の不老を一時的に解除する方法も発見。

書かれた内容に従って描いた魔法陣と、チートの膨大な魔力でゴリ押しすれば何とかなるそう。

そうしてばらばら眺めていると、気で強化した耳に、少女の悲鳴とそれに続く怒声が聞こえてくる。

ゆっくり見るのは後回しと魔導書をリュックに片付ける。

リュックをマントの倉庫に仕舞うと、そのまま羽織り一気に声のした方へ駆けだす。

さあ……この世界の物語の、メインヒロインを救いに行きましょうか。

主人公設定（前書き）

本作の主人公・シルヴィアの設定をまとめています。

後の話の設定も追記していくので、若干のネタバレも含まれます。ご了承ください。

主人公設定

名前

シルヴィア・マクダウェル（前世の名前は封印 消去されたため容姿のキャラクターからそのまま名乗らせてもらう。第4話でエヴァンジェリンと義姉妹になったので、以降マクダウェル性を名乗る）

職業

OL 神（魔王）候補

年齢

22歳（前世・転生後の肉体年齢）不老不死により永続）
122歳（精神と の部屋で修業後の精神年齢。以後加算）

容姿

小説『レイン』シリーズのシルヴィア・ローゼンバーグを原作15〜6歳の美少女から22歳の美女に引き上げた容姿。
身長は170cmほど。スリーサイズはボンキュッボンのグラマラス美人さん。Ecupのポイン級。
サファイアブルーの瞳。彫刻のような造形。高い腰からすらりと伸びた脚、肌も白くきめ細やかなすべすべシルクの完璧美女仕様。

貰った能力

不老不死：首を落とされても心臓を撃ち抜かれても死なない。

超再生：負傷した次の瞬間には傷が癒える。

ステータスマAX：肉体的には古龍を片手で屠る事が出来る。精神的・頭脳的にはMIT（マサチューセッツ工科大学）の首席の学力が赤ん坊に思えるぐらい。IQに換算すると250ぐらい。

気と魔力の総量増加：総量がエネルギー換算地球5つ分。

あらゆる技術を短期間で効率よく習得する才能：常人の10倍から上の習得効率

前世の世界の一般常識

魔眼：分析・解析特化型。情報の取捨選択、特定情報のロック機能

など多機能・汎用性高。魔力を込めると発動。発動中は両目が深紅に染まる。

保有スキル

気：臍の下、集積地である丹田から通り道である気脈を通して全身に気を流し、身体強化が行える。単純な筋力強化から反応速度や体感時間の向上など効果は幅広い。手や足に集中させた気弾を放って攻撃することが出来る。『高速移動術・瞬動』が使える（第3話）

魔力：臍の下にある丹田（気と別物だが、場所が同じなので同名にした）から通り道である魔脈を通して全身に魔力を流すことで、身体強化が出来る。強化の効果は気と同じ。詠唱その他、精霊に魔力を渡すことで、魔法を行使用することが出来る。（第5話・第6話）

魔法具作成：物質の合成・神様特製装備品からの能力コピー及び物質への付与・オリジナル魔法具の作成が可能（第9話）

魔法について

世界に存在するマナ（生きとし生けるものが持つ）を魔力に変換、精霊に渡すことで魔法を具現、行使する。

魔力は気と同じく、人の根源的・感覚的に関わり、気配として察知する事も出来る。近くに居れば内包する魔力量で分かるが、遠くに居る場合、使用された・変動した魔力量で察知される（目の前の存在の無い方魔力量で力量を見抜く・遠くで膨大な魔力が消費されたのを察知するなど）察知する感度は術者の技量に左右される。

魔力障壁：魔力を使って作る魔法使いの基本防御手段。一度作ると自らの意志で壊すか他者に壊されるまで自動で展開。作る際に魔力を消費。強度は術者の技量や魔力量により変化する。

基本体系

詠唱魔法：呪文を詠唱することで発動。もつとも基本。

術式魔法：魔力を込めた魔法陣を形成。その中で鍵とする行動（陣の中に入る、陣の中で魔法を使う等）で発動。畏の様な魔法。

術式詠唱魔法：上記2つを合わせた魔法。鍵となる行動が詠唱になる。

基本的に上から下に下がるにつれて威力が上がる。ただし魔法使い本人の技量^{II}制御力や魔力量に左右される。

無詠唱魔法：詠唱を破棄して発動する魔法。基本的に詠唱を行うよりも威力は落ちる。これも魔法使いの技量・魔力量に左右。

属性

火・氷・風・土・雷・水の6属性（左から右に強い関係を持つ、水は戻って火に強い）

闇と光の2属性（反発）

シルヴィアは全属性適性を持ち、特に雷・闇が得意

FF魔法

シルヴィアのみが使用できる魔法。

神様に貰った装備

ロングブーツ

膝下ぐらいの長さの黒ブーツ。ヒールはないぺたんとしたタイプ。

オートリジエネ

自動体力回復魔法・自動加速魔法

オートヘイスト

自動加速魔法

オートクリーン

自動清潔魔法

オートリペア

自動修復魔法が

付与。

ブラウス・ホットパンツ

どちらも黒。ホットパンツはぎりぎりお尻が出ない短さ。

オートクリーン自動清潔魔法・オートリペア自動修復魔法が付与

ローブ

黒地に赤と金で飾りつけ。袖あり・前開き・フード付き・腰丈の、

パーカーの様なローブ。

オートプロテス自動物理防御魔法・オートシエル自動魔法防御魔法・オートリジエネ自動体力回復魔法・オートリフレッシュ力回復魔法・オートクリーン自動清潔魔法・オートリペア自動修復魔法・オートファイブ自動環境快適魔法が付与。

マント

膝下丈のフード付き袖なし、胸元でボタンで止める完全外套使用。

色は黒。

オートプロテス自動物理防御魔法・オートシエル自動魔法防御魔法・オートリジエネ自動体力回復魔法・オートリフレッシュ力回復魔法・オートクリーン自動清潔魔法・オートリペア自動修復魔法・オートファイブ自動環境快適魔法・オートホルド自動収納魔法が付与

ヘルメスの杖

全長150cm。片手で握る事ができる太さ。先端から20cmほどが太く六角形の台座を形作る。その台座の上に6つの爪で固定された拳サイズの水晶が付いている。台座には2匹の蛇が絡まり螺旋を描いて上り、台座の淵に頭を付ける意匠が施してある。魔力を込めると30cmほどの短杖に変化する。

オートリフレッシュ
自動魔力回復魔法付与・魔力伝達効率強化・魔力集束効率強化・魔力拡散効率強化・耐久力強化

妖刀正宗

刀身30cmほどの短刀。鍔なし。魔力を込めると刀身60cmの日本刀（正宗）、90cmの大太刀（妖刀正宗）に変化する。
オートリジエネ
自動体力回復魔法付与・切れ味強化・耐久力強化
ステータスリミッター
能力制限魔法付与。全力に対して力の何割かが制限される。正宗で8割、妖刀正宗で10割の力を出せる（第9話）

オリジナル装備

エターナル・リング
永遠の契りを結ぶ指輪（第9話）

エヴァと2人、永遠の契りを結んだ指輪。シルヴィアの指輪の内側には『E t o S』（エヴァンジェリンからシルヴィアへ）の文字が刻まれている。

オートプロテクト
自動物理防御魔法・自動魔法防御魔法・自動体力回復魔法・自動トリフレッシュ
オートハイスト
魔力回復魔法・自動加速魔法・自動清潔魔法・自動修復魔法・自動オートフライン
オートホルト
環境快適魔法・自動収納魔法付与・魔力伝達効率強化・魔力集束効

率強化・魔力拡散効率強化・耐久力強化・誤認強化（装着者の意志で魔力を流すと指輪が第三者から見えないようにする・装着者及び指輪本体の魔力を隠蔽することが可能）

魔剣・クライスト（第9話）

サーベル状の長剣。二振りの姉妹剣。エヴァンジェリンにも同じものを渡す。細身で反りのある刀身自体は銀に輝き、込められた魔力により黒く輝く。先端10cmほどでは背の部分から刃に向かつて更に尖っていき、刺突も可能。護拳も広め。

刀身から鍔、柄や護拳、鞘に至るまで全てミスリル製

オートリシエネ自動体力回復魔法付与・切れ味強化・耐久力強化・魔力強化（純粹に魔力を込め切れ味・耐久力を更に強化）

ステータスリミッター能力制限魔法付与（シルヴィアのクライストのみ。全力に対して力の何割かが制限される。クライストでは全力の6割が限界）

元ネタはBLCKCTのセフレリア・アース

貰った持ち物

リュック

片方の肩にかければ済むくらいの小さな黒いリュック。実は神様の力で容量が無限にされている。中の袋類も同じく容量無限。

中身

松明・ランプ・金物の鍋や食器・水筒・タオル・火打石・釣竿など旅の必需品がごろごろ。小分けにした袋。財布

水筒

竹製の小さめのものが六本。味は水・レモン風味・オレンジジュース。これも神様製の中身無限。

小分け袋その1

シルヴィアの着る服装が3セット。予備。

小分け袋その2

色とりどり、可愛いからセクシーまで幅広い多数の下着。

小分け袋その3

食糧袋。食糧が少々入っている。

小分け袋その4

今のところ空。

その後、手に入れた食糧以外の物資・財宝を入れる徴収袋へ（第1話）

財布

手のひらサイズの革袋製。中には数枚の金貨。

魔導書

シルヴィアの介入した『魔法先生ネギま』をベースにした世界に存在する全ての魔法を記述した魔導書。

その他幅広い情報も記載（第5話）

事情

突然変異により魂が神・魔王クラスの格を得た一般人・女性。

増加する人間界に神・魔王Ⅱ管理者の手が回らなくなりつつある状況を受け、神様より勧誘を受ける。

刺激的な生活を求め、神（魔王）候補として並行世界である人間界へ介入する管理者として歩み始める。

最初の世界は『魔法先生ネギま』ベースの世界。

性格・内面

前世から覚悟を持ち貫く誇り高い人物が好き。自分もそう在りたいと常々考え実行する。

どんな事情であれ、行動と選択には相応の責任が発生する、が信条。もともと一般人だが、今後を考え入った神様の持つ部屋で殺しを含め、これからの自分に対する覚悟を決める。

『私は、私と私の大切な者のために生きる。そのために力を行使する』

自分や自分が気にいった・大切な存在のためには全力を尽くす事を厭わない優しさと、逆に気に入らない・どうでもいい存在に対しては無関心で関与しない、目の前で生きようが死のうが構わないと斬り捨てる冷酷さを併せ持つ。

自分や自分の大切な存在を邪魔する者・仇成す者は全力で叩き潰す
冷徹・苛烈さも持つ。

自分は正義の味方などではなく、無関係な全ての人のために動くこ
となどないと割り切っている。

1人の大切な存在と、1000人の無関係な存在。どちらかしか助
けられないなら迷わず1人の大切な存在を救う。

究極的に、自分と自分の大切な者が幸せであればよく、その他は端
的に言ってもいいという考え。また、それらを助けなければ
ならない理由はないと考えている。

ここで言う大切な者とは、広義的に人・物・概念的な存在「組織や
社会、国など幅広く指す。

こういった考え・行動が可能なのは、力を持つ者故の権利であり、
同時に傲慢・排他的であるとも理解している。

理解した上で受け入れ、貫く覚悟を決めている。

管理者としての道を選択した責任は、物語を見届けることで果たす。
自分と自分の大切な者のために生き、力を使う。その覚悟を貫く途
上で邪魔する者を排除したり、殺したりしたとしても、躊躇も後悔
もせず、ただその事実・存在を受け入れ、背負い、歩む覚悟を決め
ている。

某皇子の言葉「撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ」が
好き。自分を撃つ側に置き、撃たれる側の事情には頓着しない。撃

たれる側が強かろうと弱かろうと、正しかろうと悪かろうと関係なく撃つ。全ては自分と自分の大切な者が生きるために。いずれ自分が撃たれる事態に陥るかもしれないとしても。その覚悟を表す言葉として、このセリフが好き。

基本的に公私のON/OFFが出来る人。

仕事はクールにスマートに。遊ぶ時・ハメをはずすときは思い切り外す。

またそういう人に好感も抱く。

女だらけの孤児院育ちで、女子高・女子大出身。レズビアン・サディストの性癖持ち。

また、その情報を隠す事もせずオープンにしている。

学生時代、多くの女生徒・女教師を虜にして跪かせ可愛がる様から付いたあだ名は女帝。

中学時代は引きこんだ人間で固め男子を封殺。勢いで学校全体を掌握したこともある。

特に深い関係を結んだのはごく一部。その全員を分け隔てなく愛し、相手に認めさせるだけの愛を持つ。ハーレム主人公補正付き。

男嫌いという訳ではなく、会話も普通にできる。ただし興味が沸かず恋愛感情も発生しない。

前世ではゲームなどもそれなりにした。プレイスタイルは限界まで育て上げて蹂躞する無双タイプ。性癖：サディストも関与。

圧勝という言葉が好き。合言葉は『粉碎！玉砕！大喝采！』

性癖：レズビアンの影響により可愛いものに目がない。この場合の可愛いは、見た目はもとより内面が重視される。

誇りや信念、確固たる自分、というものを持っている人、思慮深い人などが好き。

逆に浅慮な人、勢い任せな人、与えられたもののみで思考しない人などは嫌い。

そんなシルヴィア基準をクリアした存在（人・物）全般を『可愛い』と評価する。合言葉は『可愛いは最強！』

その最初の1人、エヴァンジェリンを深く愛し永遠の契りを結ぶ。

『エヴァンジェリンの幸せが、自分の幸せ』という想いを持つ。）

（第9話）

性癖

元々レズビアン・サディスト持ち。

この世界に来てからの恋人・エヴァンジェリンと自分の不老不死や無尽蔵の体力、絶頂に終わりが無いなどの女性的特徴が重なる事で、サディストが更に進行。加えてエヴァンジェリンを自分好みに染めてしまう。

深く愛すれば愛するほどに、壊れる程に愛したいなど、嗜虐的・狂気的な一面も持つ。(ヤンデレではない)

魔法習得で拍車がかかる。現在任意で両性具有化可能(魔法による肉体変化・第9話)

「皆さまごきげんよう。作者のクロです。ご挨拶が遅れたことをお詫びするとともに本作読んでいただきありがとうございます。」

「主人公のシルヴィアよ。私からも感謝するわ」

「今回は第1話・第2話で出てきた主人公・シルヴィアの設定をまとめさせていただきました。今後も更新すると思います」

「ねえクロ。太丈夫なの、これ。色々インフレしてない？」

「大丈夫です。この作品の合言葉は『粉碎！玉砕！大喝采！』ですから」

「つまり私が無双すると？」

「そうですね。ちなみにもう1つの合言葉は『可愛いは最強！』です」

「そこは正義じゃないの？」

「正義は一義的ではないのです。ちなみに至高も考えましたが、クロのリスククトする某作者様と被ってしまうので最強にしました。」

「どちらにしてもその合言葉だと・・・色々食べちゃいそうね」

「その予定です。どれだけ無理矢理感をなく自然に墮とせるか・・・それが課題です」

「前提からしてハードル高いわよね。というか中学生を墮とすって・・・まあ魅力的な子が多いのは否定しないけど」

「具体的にはメインヒロインとその従者に加え、日本人形系お嬢様・護衛・西洋系お嬢様・和風お嬢様・スナイパー・同人メガネっ子・ヴァーチャルメガネっ子・養護教諭、以上が現在の目標です」

「隠す意味あるの？というか多いわね」

「一応念のためです。まあしばらくは登場しません」

「しばらくは原作前の話ね」

「プロット確かめるとかなり長くなる予想ですが、気長に楽しんでいただけると嬉しいです」

「天上天下唯我独尊突っ走っているわよね。読み手を選びそうね」

「まあ、それも含めて『私は、私と私の大切な者のために生きる』です」

「今回はその大切な者、メインヒロインの登場ね」

「いかに颯爽と、カッコよく助けるか。そしてその後口説き墮とすか。それが問題です」

「せいぜい悩んで私を活躍させなさい。それじゃあ今日はこの辺でお別れね」

「作者より偉いとはこれいかに」

「なにか？」

「いえいえ」

「それではまた次回お会いしましょう。皆さま、ごきげんよう」

主人公設定（後書き）

よければ感想、お待ちしております。

第3話 遭遇と怒りと首チヨンパ（前書き）

前回のあらすじ

覚悟を決めた。

世界に介入開始。管理者人生スタート。

神様から貰った物を点検。

第3話 遭遇と怒りと首チョンパ

羽織ったマントを靡かせながら少女の悲鳴が聞こえた方へ向かって森の中を駆けていく。

元々のチートボディに加えて、全身に気を巡らせ強化した私が走れば、常人では到底到達できないスピードを出す事が出来る。

ほどなく、目的地に到着。

そこに彼女は居た。

原作の登場人物の1人、私の会いたかった相手。

金髪の西洋人形のような美しさを持つ彼女の名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

呪いによって吸血鬼の真祖^{ハイ・デイルイトウォーカー}、日の光や流水など一般的な吸血鬼の弱点を克服した上位種、人ならざる存在にされてしまった少女。

私の到着はまだ誰にも気づかれてはいない。

崖を背に震える少女と、それを囲む大人の男達。

数は全部で10人。

私はその大人達の後ろに着いた形だ。

少女は少しずつ下がっていたようだがそれも限界。もう少し踏み出

せば崖下の川に真つ逆さまの状況。

「ようやく追い詰めたぞ、邪悪な吸血鬼め！」

人垣の中心、いかにもなローブを羽織った男が杖を少女に向け叫ぶ。

見るからに聖職者。問題は『どちら側』の人間かという事。

普通の人間たちが暮らす『あちら側』、たしか『旧世界』と言った
かしら。その聖職者でも、この時代なら杖を持っていておかしく
ない。

魔女狩り・異端狩りも最盛期はもう少し後としても、全くない訳じ
やない。

まあ、この場に限って言えば『あちら側』であろうと、『こちら側』
つまり魔法が認識されている『魔法世界』の側であろうと関係ない。

しかし今後の事を考えるなら話は少し変わってくる。

追手云々の話しになるからだ。

回りの他の大人は明らかに付近の村人という様子。ローブ男の言葉
に乗せられて来たのだろう。

視線や表情、纏う気はまさに“狂気”

予想通りだとしたら・・・恐らくその通りなのだろうが・・・
なんとも虫唾が走る。

「あなた達、いい大人が寄って集って1人の少女に、何をしているのかしら？」

声を掛けながら森から出て近寄る。

その時、私は自分の胸が締め付けられるような痛みを感じた。

こちらに背を向けていた大人達より一足先に彼女は私の存在に気付いた。

新たな声が聞こえたことよって助けを期待したのだろう。

その表情を一瞬、安堵に彩られる。

しかし次の瞬間、出てきたのが私だと、否、“大人”だと気付いた彼女の表情は、落胆・諦観のそれに変わる。

神様の話では、時間軸としては彼女が吸血鬼の真祖ハイ・テイライトウォーカーになって1週間というところ。

その間、逃げ続け、心をすり減らして来たのだろう。

いつの間にか、私は拳を握りしめていた。

胸に渦巻くのは明確な怒り。

彼女を人ならざる存在に変え、大切なものを奪った元凶に。

教え植えつけられた知識と感情だけで彼女を人ならざる者と罵り、恐れ、害そうとする目の前の男達、否、下衆達に。

そして何より、力を得ながら目の前の彼女すら救えていない私自身に。

不老不死の呪いはもとより、この1週間の苦しみと言う意味で。

私が彼女を救いたいと思っていたのは神様も知っているだろう。

それでおお1週間後という時期だったのは、それが介入の限界だったからだと言想できる。

つまりは、今の時点の私ではどうにもできないことと言える。

そもそも全人類を助けられる訳では無いし、助けようとも思わない。

候補とはいえ神にも出来ることと出来ないことがある。

それでも目の前の少女を一時でも苦しめ、救う事が出来なかったのが腹立たしい。

たとえ原作知識と言う色眼鏡の部分があったとしてもだ。

「なんだ貴様は！我々の邪魔をするのか！」

そんなことを考えていると、目の前のローブを着た下衆が返事を返してきた。

最初はマント、外套を羽織る私を唯の旅人とも思っただろう。

しかし黒と言う色にいぶかしみ、若干の警戒をしながら声をかけてくる。

「言ったでしょ、あなた達が彼女になにをしているかを聞いているの」

「この娘はこう見えて吸血鬼なのだ。それも上位種の真祖だ！故に我々が討伐する！」

「なぜ？」

「吸血鬼は悪だ！悪は滅ぼさなければならぬ！だから正義たる我々が討伐するのだ！」

想像通りの、なんともお粗末な話だ。

しかしそのお粗末な話しを並べる下衆も、周りの下衆達も、皆正義と言う言葉に酔い、当然とばかりの表情。

・・・まだよ、シルヴィア。まだ抑えなさい。まだ引き出せる情報があるはず。

そう思いつつ、元々嫌いだった正義という言葉がより嫌いになるのを感じながら話を続ける。

「その子が吸血鬼？冗談でしょう？なにかそうだと言う証拠でもあるの？」

「……………」

その私の質問に、饒舌だった下衆の言葉が止まる。

とっさの反論がない、という事は1つの可能性が浮かび上がる。

この男の根拠としている事象が『魔法世界』の理屈によるもの、という可能性だ。

原作の知識と神様の話しが確かなら、彼女が吸血鬼の真祖にされたのは1週間ほど前、10歳の誕生日。

親は地方領主で、城で開かれた盛大な誕生会の中に吸血鬼に襲われ、呪いに掛かり吸血鬼の真祖となったはずだ。ハイ・テイルライトウォーカーしかも親を含め身内や参加者を虐殺されて。

もし下衆が『旧世界』側の人間なら、ただその事実を述べて、唯一不自然に生き残った娘の仕業、とでも述べればいい。

しかし結果は沈黙。

なぜなら下衆の根拠は、ハイ・テイルライトウォーカー吸血鬼の真祖としての覚醒による強大な魔力の流れを感知したから……などというのはどうだろうか。

突然の質問に、反射的に『魔法世界』の秘匿を行ってしまったのではないか。

少なくとも、この下衆から何かしら知り得ることができそうだ。

そんなことを瞬間的に考えていると・・・

「根拠ならある！」

別の下衆が突然叫び出した。

「領主様の城に多くの死体があつた！こいつだけ生き残ってたんだ！こいつはお嬢様の姿を似せた化け・・・」

ザシュツ！

その先を下衆が話す事は無かつた。

特に考えて動いた訳ではない。

ただこれ以上彼女を苦しめたくなかつただけ。

むしろ遅すぎたと後悔するくらいだ。

下衆がわめきだした次の瞬間には、下半身に気を流し張り巡らせる。

同時に足の裏と地面の間で気を爆発させて、一気に接近。

『高速移動術・瞬動』

10mほどの距離を一瞬で肉薄。

同時に右手で左腰から抜いた短刀に魔力を流し、日本刀・正宗に変形。

すれ違いざまにその首を切り落とし、彼女と下衆共の間に立つ。

ドサッ！

ようやく頭が落ち、続いて体が崩れる。

目の前の少女は、目を大きく見開き驚愕している。

いくら吸血鬼ハイ・デライトウォーカーの真祖といえども、なり立てのこの子にしてみたら、突然目の前に現れたようなものだ。

それとも、あっさり殺したことに恐怖されているかな？

そんなことを考えつつ、安心させるように、優しく微笑みかける。

より大きな驚愕、そして反射的に疑いの視線。

悲しいが、仕方がないことだとそのまま体を反転、下衆共の方を向く。

「「「うわああああっあああああ！」「」「「「ば、ばけも
のだ—————！」「」

少女に向けた、微笑みとは真逆の怒りの視線を向けると、6人が逃げ去る。

残り3人。うち2人の農民は、手に持っていたすきや鍬を振り上げようとする。

「遅い！」

再び瞬動を使い、2人の首を飛ばす。

斬り殺しながら、入念に自分の心を探る。

あの神様特製の部屋での訓練が効いたのか、躊躇も後悔も感じていない。

そこには、満足しつつ、最後の下衆と対峙しようと視線を向ける。すると聞こえてきたのは・・・

「『トレース・スピリトゥス・セラキエリチニス・サキテント・イニミクムプラクテ・ビギ・ナル！氷の精霊3柱、集い来りて敵を射て！
サギタ・マギカ セリエス グラキアーリス魔法の射手・連弾・氷の3矢！』」

やはり魔法使いだったようね。

それにしても3柱を撃っていないながら、最初の始動キーだったかしら？あれが初心者用のやつなのはどういうことかしら。

単発じゃないってことは一応学んではいるのだろうけど。

原作の基準、どうだったかしらね。3桁行ったらかなりのものだった気がするけど。

並の魔法使いは2桁くらいかしら。

などとのんびり考えていられるのも、気のお蔭。

反応速度や体感時間も向上しているおかげでこんな状況でも冷静に
思考できる。

実際、ただ避けるなら寝ていても出来るくらい余裕。

というか装備の自動防御魔法たちで十分。マントの分すら越えるこ
とはできないだろう。

でもこの後の色々な説明を考えると、ここで彼女に私の人外っぷり
を見せておく方が早いかもしれない。

また傷つけるかな？・・・そんな自分に苦笑と若干の怒りを覚える。

そんな感情を抱えながら、私は魔力を装備に流して、マントとロー
ブの自動防御を切る。

そうして・・・飛来する氷の矢を正面から受けた。

「え？・・・い・・・いやー！！！！」

ああ・・・また悲しませてしまったわね・・・つくづく情けない。

「はははははっ！正義の使者たる私の邪魔をするからこつなるのだ！」

見事命中させた下衆が何か騒いでる。

しかし気付かないのだろうか、ある異変に。

「ははははは・・・はは・・・は・・・ん？」

ああ、ようやくお気づき？まったく鈍いわね。

私は構わず後ろを振り返る。

「大丈夫よ・・・ごめんね」

そうして、驚愕に固まる彼女に微笑み、驚かせたことを謝る。

それにしても、つくづく度し難いと自分でも思うが、彼女が悲鳴を上げてくれたことに嬉しいと思う自分がいる。

たとえ警戒していようと、自分を守ってくれた人間が傷付くのに反応して悲鳴を上げる。

そんな彼女の優しさが嬉しい。

そんなことを考えながら、目の前の下衆に意識を向ける。

口をパクパクさせて、言葉も無いようだ。

それもそうだろう。

なぜなら今の私は、胸と腹部、右太ももの3か所を氷の矢が貫通しているのだから。

ぶつちやけ、痛い。でもまあ、100年の特訓で痛みにも慣れた。

普通なら即死の状況で、さらに見せつける。

あいた左手で氷の矢を掴むと、3本ともぽんぽん抜いてしまう。

開いた穴から血が吹き出るが、それもすぐに止まる。

2人の目の前で傷が瞬く間に塞がる。

後ろの彼女の反応はわからないが、下衆はがくがく震えだした。

「彼女が吸血鬼だから、人ならざる存在だから殺すと言うのなら・・・
・私も殺さなければならぬわよね？」

あえてクスクス笑いながら話しかける。

ドサツと音を立てて、下衆は尻もちをつく。顔面は蒼白、そのままずりずりと下がり始める。

「まあ、あなたの事情なんか関係ないのだけれどね。彼女の受けた苦痛、私の受けた苦痛、その代価は払ってもらおうわ」

「うわあああああああ！」

ザシュッ！ザシュッ！

私の言葉に、ついに恐怖が決壊した男は、そのまま四つん這いで逃げよつとする。

私が瞬動で前に回り込むと、そのまま両手を斬り落とし、蹴り上げ仰向けにする。

「ぎゃあああああああ！腕がああああああ！」

「うるさい」

そのまま顔を踏みつけ、無理矢理黙らせる。

「私の質問に正直に答えなければ殺す。余計な事を話しても殺す。質問を終えたら・・・まあ『助けて』あげる。OK？」

踏みつけ話す私の言葉に、下衆はコクコク必死に頷く。

もう大丈夫かと、足を外して質問を始める。

「最初の質問。あなたは魔法使いね。どうして『旧世界』の、こんな所に？」

「見聞を広めるために旅をしていた。その途中で今回の件に遭遇したんだ」

「どうやって彼女が吸血鬼だと知ったの？」

「1週間前、ちょうど私は問題の起こった城のすぐ近くの町に泊まっていた。そこで夜に突如強大な魔力が溢れ出すのを感じた。念のため朝まで待って町の間人と共に城に向かうと、そいつ1人を残して全員死んでいた。人間の子供が起すには規模が大きすぎた。魔力の残滓も残っていたから吸血鬼だと思ったんだ！」

「たまたま居合わせ、相手が悪である吸血鬼だから殺そうと？」

「そうだ！・・・吸血鬼は殺す、普通の事だろ？なあ、もう話す事は何もないよ！頼む！助けてくれ！」

「ふん。まあ、もう聞くことはないわね。いいわよ」

「ほ、本当か！」

「ええ・・・苦しみから『助けて』あげる」

「・・・？」

「彼女が逃げたのは助かりたかったから。その彼女をあなたは助けようとしたかしら？」

「・・・！ま、まってくれ！」

「正義だ悪だと言葉を振りかざして、一方的に彼女を殺そうとした人間が命という意味で助けを乞えると思う？」

「お、お願いだ！」

「私の大好きな言葉にこんなのがあるわ。『殺していいのは、殺される覚悟のある奴だけだ』」

まあ、言葉は少し違うけど意味は同じだからいいでしょう。

彼の物語はかなり好きだったから覚えていてる。

私みたいなチートバグキャラが言っても説得力は薄いけれど。

それでも私の覚悟から考えると、殺される覚悟くらいは当然持っている。

好きなように生きる、そのための障害を排除する、というのが往々にして反感を生むわね。中には恨まれる事態になるかもしれない。

その結果撃たれるかも、殺されるかもしれない。まあ、ただで殺されるつもりは毛頭ないけれど。

「な、なんでもする！だから・・・」

「私、約束は守る性質なの。だから約束通り、苦しみからは『助けて』あげる・・・もう用済みだしね。さよなら」

「まっ・・・」

ザシュツ・・・ゴロン

寝転んだ下衆の首を斬る。

転がった首の表情は恐怖に彩られていた。

それでも私の心には波風1つ立たない。

正直取るに足りない存在に、いちいち心動かされたりはしない。

それを確認できただけでも有益かしら。

……本格的に魔王化フラグかしらね。

埒もない事を考えながら、正宗の血を払い、短刀に戻して鞘に納める。

くるりと振り返り、少女を見つめる。

正直、今までの事は前座になりもしない。

彼女とのこれからの会話に比べたら、斬り殺した3人の存在なんて私にとっては路傍の石以下だと思う。

だからこそ頭を切り替えて望まなければならない。

彼女を1人にはしたくないから。

それがたとえ私の勝手だとしても、押しつけだとしても。傲慢だとしても。

これから彼女が歩む長き道。

1人では歩ませたくない、悲しませたくない。

否、それは私も一緒か。

ここでもし一緒に居る事を断られたら、600年ほど私も1人ぼっちか。

むむむ・・・ますます失敗できなくなった。

さて、まずは何から話そうか。

そう考えながら、ゆっくりと彼女に向かって歩き出した。

第4話 出会い、歩み寄る者達・事情と理由と旅立ち（前書き）

前回のあらすじ

少女に悲鳴に駆けつける
下衆共をお掃除

第4話 出会い、歩み寄る者達・事情と理由と旅立ち

下衆共の掃除が終わった私は、振り返りゆっくり彼女に近づく。

5mほどの間を空け止まると、ゆっくりしゃがむ。

焦ってはいけない。

なぜなら彼女は、今も警戒し、こちらの一挙手一投足に目を向けている。

突如人ならざる者に勝手に変えられ、周りの大人達から言われの無い罪で追われ、訳も分からず逃げ出す。

10歳の少女が経験するには酷すぎる状況が、彼女の警戒心を形作る。

焦ってはいけない、急に動いて驚かせてもいけない。

そう心に刻みながら口を開く。

「大丈夫？」

「……………」

「私の名前はシルヴィア。吸血鬼では無いけれど……私も人以上の力を持つ、人ならざる者よ」

「……………」

「少し話がしたいの……よければ移動しない？」

そこまで話すと一旦口を閉じる。

なにもこんな血の匂いが漂う場所で長々と話はしたくない。

かといってそれより重要なのは彼女と一緒に来てくれるかどうか。

だからまずは彼女のアクションを待ってみる。

口を閉ざしたままの彼女。その表情は少なくとも思案はしていると思う。

まずは第一歩と言ったところか。考えもせず断られる可能性も無かった訳じゃない。

あくまで想像しかできないのが歯がゆいが、それだけ彼女の受けた心の傷は深いだろうと思う。

ふと思案する彼女の瞳が、私の左腰に差した短刀に向く。

「これが怖い？」

「……(コクッ)」

初めての目に見えるアクション。また一步前進。

まあ当然と言えば当然かしらね。あれだけの殺戮を見せつけたのだから。

そう思った私は、ゆっくりマントの裏地からリュックを取り出す。
何も無いところから取り出した私に驚く彼女。

私は「後で教えてあげる」と微笑むと、マントを脱ぎ、短剣と短杖を外し、マントと一緒に2人の中間くらいにゆっくり放る。

私の行動に困惑する彼女。

「私は貴女を決して傷つけない。その証として武器も預けるわ。」
視線を合わせ見つめながら、はっきりと告げる。

驚愕・困惑・歓喜・疑惑、と言ったところだろうか。

さまざまな感情がうずまく表情で、私と地面に放られた荷物を交互に見る。

やがてゆっくりと、一歩ずつ踏みしめるように歩き出す。

そうして私と彼女の間辺りに放られた荷物を拾い抱きしめる。

その瞬間、彼女に聞こえないように抑えつつも、安堵の吐息を洩らす事は止められなかった。

まだ先は長いが、これで切っ掛けを作る事は成功したようだ。

「それじゃあ、移動するけど、いいかしら？」

「……(コクッ)」

そうして私達は歩き始めた。

しばらく歩くと、最初に目にした小川の脇に降りる事が出来た。

都合の良い事に、その近くで座るのに適した岩が転がっている場所も見つけた

他の旅人も利用したのだろう。岩の並ぶ中心には焚き火の跡がある。それ自体は、だいぶ時間が経ったものようで、気を使って周囲を探っても人の気配は無い。

「……でいい？」

「……うん」

後ろから付いて来ていた彼女に尋ねると、小さいながらも答えてくれた。

たったこれだけの事が嬉しいと思う私は少々危ない人に思えてくる。同時に、原作の知識、そういった色眼鏡で彼女を見ることは危険だとも思う。

私が今ここに居るのは、原作の知識があり、原作の彼女が好きで、彼女を助けたい、共に生きたいと思ったから。

それが押しつけであれ、我儘であれ、私の本心。

でも、原作のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと、目の前の彼女は違う。

そう再認識し、自分を戒めながら岩に腰掛ける。

リュックをあけ、竹の水筒を3本取り出すと、反対側におずおずと座った彼女にそつと差し出す。

「……?」

「それでも飲んで、少し待っていてくれる?私、薪になりそうなもの探してくるから」

「……あり……がとう」

おずおずと受け取りながら答える彼女に微笑みかけ、私はゆっくり立ちあがる。

それでもびくりと震え、こちらを見てくる彼女。

驚かせたかな？とも思ったが、どうやら少し違つようで。すぐに思いつく。

「大丈夫、すぐその、見える範囲で集めてくるから・・・いい？」

「・・・(コクッ)」

私の言葉にほつとしたのか、頷き緊張をほぐす。

それなりに心は開いて来てくれているかな、と思いつつ、話を続ける。

「そうそう、少し寒くなってきたから、そのマント羽織って待っていてね」

すでに日は傾き時刻は夕方ぐらい。周りの木々の紅葉具合から季節としては秋ぐらいだと予想。

場所は日本より北に位置するイギリス、まして元いた世界から見ても600年前なら、気候的に気温が低いかもしれない。

そう思い声をかけてから、森の脇に向かい枯葉や枝を集め始める。

薪を集めながらそつと様子を伺つと、おずおずマントを羽織って自動環境快適魔法の効果に驚いたり、勝手に自分サイズに修復されて驚いたり、水筒の中身がそれぞれ味が違うのに驚いたり、オレンジジュースが気にいったのかごくごく飲んだり、中身が尽きないことにまた驚いたり、先ほどとは打って変わって年相応の反応を示してくれた。

はつきり言えば・・・・・・・・何この可愛い生き物、である。

原作エヴァを誇り高き大人ロリッ子とするなら、目の前の彼女は年相応ピュアロリッ子だろうか。

そんなおバカな事を考えつつ、彼女の反応を堪能しつつ、集めた薪を持って戻る。

「あ・・・・・・・・これ・・・・中身が。それに・・・・このマントも」

水筒を掲げ、訪ねてくる彼女。

「ええ、それも魔法の効果なの。中身は無くならないから好きだけ飲んでいいのよ。魔法の事も気になるだろうけど、後でちゃんと説明するわ」

安心させるように微笑みかけると、薪の準備を始める。

既に前の旅人が残したおかげで石の竈が作られていたので、そこに必要なだけの薪を並べ、リュックから火打石を取り出して着火する。

数回打つだけであっさり火種が着く。・・・・確実に魔法の効果と思いさつと確認すると、ある意味予想通りで魔力付与がされていた。

明確な魔法ではなく、魔力付与。ようはとてつもなく火が付きやすいが分類上ただの火打石、と言うことだ。

まあいいやとリュックに仕舞うと、今度は食糧が入った小分け袋を取り出す。

中には乾物と果物がごろごろ。あとは塩と・・・紅茶の壺。とりあえず、ステーキ見たいな大きさのビーフジャーキーと、魚の干物、リンゴを取り出すと袋をそのまま彼女に渡す。

「あんまり種類ないけど、好きなの食べていいから」

座っていた岩に干物とリンゴを置くと、リュックから鍋を取り出し川に水を汲みに行く。

別に水筒から入れてもいいのだけれど、汲んだ方が早いから行く。

そういえば、乾物と干物って別物だったかしら？スルメはどっちだろ。

どっちにしても、手軽な乾物系はこれから自作しなければならぬわね。

あの小分け袋、生モノでも腐る事はないよう魔力が籠っているけど、片手で食べられるのは捨てがたいしね。

肉は血抜き・解体・塩漬けた後燻製、魚は開いて内臓取り除いて塩漬けの後、天日干しで半日・・・だったかしら。

はあ・・・元々、余程のものでない限り美味しいと思えちゃう味音痴のお蔭で、料理に興味無かったのがここで響くとはね。

神様に貰った一般常識も、全く知らないと思いだしにくいみたいだし。これは盲点だったわ。

そんな事を考えながら、ジャーキーを齧りつつ川で水を汲み戻る。

戻ってみるとそこには・・・小動物がいた。

頬いっぱい乾物や果物を詰め込む様は、リスやハムスターを想像させる。

この1週間、ほとんど飲まず食わずで、逃げていたのだろう。

少しは警戒を緩めてくれたのか、その分忘れていた空腹にさらされた、というところかしら。

私が戻ったのに気付くと、頬を染め、申し訳なさそうにおろおろする。

「いいのよ、おなか減っていたのでしょ？好きなだけ食べていいのでも焦って食べると喉詰まらせちゃうわよ？」

安心させるように微笑みながら、水の入った鍋を火にかける。

そうして視線を戻すと、口の中のものを飲み込んだ彼女は、何かを堪えるように唇を結んでいた。

人間の3大欲求の1つ、食欲が満たされて、さらに安心できたのかな？

私はそっと立ち上がり、頬に手を伸ばす。

最初はびくりと震えた彼女も、その手から逃れはしない。

だから私は、ゆっくりと、慈しむように彼女の頬を撫でる。

その瞬間、彼女は焚き火を回り込み、私に抱きついてきた。腰にまわされた腕はきつく締められ、腹部に顔が押し付けられる。小さな体から震えが伝わる。

だから私は、彼女を優しく抱きしめ、一緒に岩に腰掛ける。

「ふっ……ぐすっ……うう」

「もう……いいのよ。よくがんばったわね……もう大丈夫。私はここにいる。あなたとずっと、一緒に居るわ」

「うあああああああああ……！！！！！！！！！！」

私が小さく囁くと、少女の悲しみと喜び、その他様々な感情を取り込んだ泣き声が、夕闇に染まる森に響き渡った。

翌朝。

あのまま彼女は泣き疲れ、そのまま眠った。

私は彼女の頭を膝に乗せながら、万一に備え岩に座りながら眠った。そして目覚めると、目の前には彼女の可愛い寝顔。

豊かな金の長髪は朝の光に輝く。

完成された西洋人形のような容姿は、今の私の姿とはまた違った美しさ。

今は閉じられている深紅の瞳は、白い肌にも映える。

着ていた黒のワンピースドレスは、逃亡中に所々裂けたのかボロボロだ。

それでもその美しさを損なう事はない。

そんな可愛らしい妖精は、穏やかな寝息と共に、未だ夢の中。

つい悪戯心が起きて、その頬をぶにぶにと突く。

そんな風に穏やかな時を過ごしていると、そのうち彼女も起きる。

「……………あっ」

「おはよう、良く眠れた？」

「……………はい、ありがとうございます」

挨拶を交わし問いかければ、体を起こし、頬を染めながら頭を下げる。

そんな彼女に微笑みかけながら、手を取り立ちあがる。

「どういたしました。まずは顔洗って、ご飯食べて、話はそれからにしましょう」

そういうとリュックからタオルを取り出し、2人で川に向かう。

手を握れば、きゅっと握り返される。そんな感触を噛みしめながら。

「昨日は危ないところをありがとうございました。名乗りもせずすみません。エヴァンジェリン・マクダウェルです」

食事を終え、さあ何かから話そうかと考え出したところで、彼女は姿勢を正し、深々と頭を下げながら名乗り上げた。

親の賤の賜物か、10歳とは思えない堂々とした謝意と謝罪。

「いいのよ、あなたも大変だったのだから。それじゃあ改めて、私

はシルヴィア。後で話すけどファミリーネームはないの。好きに呼んでね。私は・・・エヴァちゃんと呼んでもいいかしら？」

「はい・・・えと、シルヴィアさん」

はにかみながら答えるエヴァちゃん。

でも、この後その笑顔を歪めてしまうかもと思うと心苦しい。

それでも事態の把握が出来た方が良くても事実だ。

「エヴァちゃん、さっそくだけど・・・何があったか、話せる？」

「!.....」

「無理に、とは言わないわ。ただ・・・」

「いえ、大丈夫です」

そう答え、まっすぐ見つめてくる瞳の何と力強いことが。

この子は本当に10歳の少女なのかと思えてしまう。

わずかに震える肩を見なければ、本気で疑ってしまったらどう。

「ただ・・・あの・・・」

そうして、私の隣に視線を向ける。それだけで何を願っているのか分かった私は手招きする。

ほっとして、隣に座ろうとしたエヴァちゃんを、私は抱き寄せ膝の上に座らせる。そうして腕の中に抱きしめる。

「ひゃっ！」

「無理はしない事。いい？」

「・・・はい」

そうして語り出したところによれば。

彼女はやはり、とあるイギリスの地方領主の娘。ただし、血の繋がりはなく、預けられた身だそうだ。

実の両親は病ですでに他界。知人であった領主夫妻に預けられ、実の娘のように可愛がられていた。

血の繋がりが無い事は周囲にも公表されており、それでもなお、子供のいない領主夫婦に変わりいずれば婿を・・・などと話が出るくらい、認められていたらしい。

彼女も義理の両親に懐き、幸せに暮らしていたそうだ。

その幸せが崩れ、事が起こったのは彼女の10歳の誕生日。

途中、具合が悪くなり一旦部屋に引き揚げた後眠ってしまったそう
だ。

目が覚め広間に戻ると、そこは既に血の海。

中央に立っていた男の足元には、両親の亡骸。

そこから先は断片的な記憶しかないらしい。

覚えているのは、男の話し、男が自分に呪いをかけたという事、吸血鬼と言う単語、成功に酔った男が両親を足蹴にしたこと、そして・
・右手に残る血肉を断つ感触。

気付いた時、男の身体はばらばらになり、床に散らばっていた。

自分の力に、行った所業に恐れ慄く彼女。

しかし次の瞬間、窓からさす日の光が、いつのまにか朝になっていた事を知らせる。

このままではいずれ異変に気付かれる。

その時自分はどうなる？これだけの惨劇、1人生き残った自分の強大な力・・・

その時全てを理解していた訳でも、想像していた訳でもない。

ただ本能が、ハイ・デイルイトウォーカー吸血鬼の真祖として覚醒した生存本能・危機察知能力が、このままここに居ることの危険性に警鐘を鳴らした。

とっさに両親の手から指輪をはずすと握りしめ、すぐさま自分の部屋に向かい着替える。

逃げることは頭にあっても、それに適したような服装はなく、結局いつも着ているようなワンピースドレスを着こむ。

2つの指輪に紐を通し、首にかける。

その時、城の入り口で人の声がする。

もう気付かれた！

次の瞬間、彼女は駆け出し、正面とは別の入り口から城を脱出した。

その時、見られていないと思ったが、中を検分していたあのロープを着た下衆に姿を見られ、その後1週間追われ続け、昨日に繋がると言っわけだ。

……話し終え、震える彼女を抱きしめる。

「ありがとう……よく話してくれたわ」

聞いた限り、ほぼ原作と同じ流れだった。と言う事は彼女の復讐すべき相手はまだ生きている。

そいつの名は『ライフメイカー造物主』

後の戦争の黒幕にして、『魔法世界』を作った存在。

その辺を含めて、今度は私が話し始めた。

この世には、神と天使が治める『天界』、魔王と悪魔が治める『魔界』が1つずつ存在する。

そして、神や魔王が管理する『人間界』が無数に存在する。

私は元々別の人間界に存在していたただの人間。

それが神（魔王）候補として力をもらい、この人間界の管理にやってきた。

「それじゃあ・・・シルヴィアさんは、神様なんですか？」

「まあ・・・見習いみたいなものだけどね。急にこんな話して、すぐには信じられないわよね」

「いえ・・・シルヴィアさんが嘘をつく必要はないですし」

そうして笑いかけてくれるエヴァちゃんを抱きしめながら話を続ける。

今回私が介入した人間界は、そんな多数の中の1つで、ここは2つの世界によって成り立っている。

すなわち、普通の人々が暮らす『旧世界』と、魔法が認知されている『魔法世界』だ。

『旧世界』の人間は『魔法世界』に存在せず、魔法の存在も知らない。

逆に『魔法世界』関係者のいくらかは、『旧世界』にも存在している。

昨日の、ローブの下衆がそれに当たる。

そして、エヴァンジェリンが掛けられ、その存在ごと作りかえられた呪い。覚醒したそれは吸血鬼の真祖ハイムデイルイトウォーカーと呼ばれる種。

吸血鬼の上位種にして不老不死の存在。一般的な吸血鬼の弱点とされる日光や流水を克服しており、吸血した相手を眷属にするか任意で選べる。不老不死からくる圧倒的再生能力、闇の眷属故の膨大な魔力から、『旧世界』『魔法世界』問わず最強種の1つとされている。

不老不死故に老いることも、死ぬこともない種。孤独を抱き続ける存在。その呪いを解く手段がない事も話す。

またその呪いを掛けた存在、すなわち造物主ライフメイカーはまだ生きている可能性も話す。

「・・・そっか、私、本当に化け物になっちゃったんだ」

そう寂しそうに話す彼女を抱きしめずにはいらなかった。

「・・・そんな言い方しない方がいいわ。・・・私は、『人ならざる者』って言う事になっている」

「『人ならざる者』？」

「ええ、人以上の力を持つ、人以外の存在。その方が、化け物よりは響きがいいでしょ？」

「くすくす、シルヴィアさんは神様ですけどね」

「あら？魔王になる可能性もあるわよ？」

気分を変えるためにおどけた会話を続けながら、神と魔王の違いを話す。

もちろん、色欲に溺れれば魔王に・・・などと話せないので、出世欲や金銭欲に置き換え、本能や欲望に忠実だと魔王や悪魔よりの存在になる事、そこでの正義と悪が一義的ではないことも説明した。

そうして話を聞いていたエヴァちゃんがおもむろに、そして意を決したように問いかける。

「それで・・・シルヴィアさんは、なぜ私を助けてくれたんですか？」

「私は、エヴァちゃんが良ければ一緒に旅をしたいと思っている」

その私の言葉に目を見開き驚く彼女。その瞳が揺れる。

そんな彼女に話を続ける。

『人間界』には、目的や理由となる『物語』が存在する。その『物

語』が他の『人間界』に、娯楽と言う意味での『物語』として存在する場合がある。

これを原作と言い、この『人間界』の原作が、かつて私が居た『人間界』に存在した。

「！それじゃあ・・・」

「ええ、その中にエヴァンジェリン・マクダウェルという人物も登場していた」

その事実更に驚くエヴァちゃん。

ここで誤解を与えないように一気に続ける。

「私は原作の中のエヴァンジェリンが好きだった。そして、その原作を基にしたこの『人間界』に来ると分かった時、彼女を救いたいと思った。彼女も、不老不死として、孤独に苦しんでいたから。そして私は貴女の前に現れた・・・だけど気付いたの」

そこで私は彼女を抱き寄せ、その瞳を真正面から見つめる。

昨日、決して傷つけないと誓った時のように。心が伝わるように。

「今日の前に居るエヴァちゃんと、原作のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは違う。私はこの人間界に来る前に決めた事があるの。それは『私は、私と私の大切な者のために生きる』と言うもの。その私が、今、守り一緒に旅をしたいと、共に生きていきたいと思っっているのは原作の彼女ではなく、目の前のエヴァちゃんだから」

そこまで話した私は、一旦口をつぐむ。私も彼女も、視線をそらさず見つめ続ける。

「もし……嫌だったり、時間が必要なら……」

「行きます」

すこし間を置こうか……そう続けようとした私に、エヴァちゃんははつきりと続けた。

その時になってようやく、私は緊張していたことに気付く。

震える手をそのままに、彼女の頬に当てる。

「いいの？」

「はい……さっきも言ったけど、シルヴィアさんは嘘をついてないと思う。その必要もないし、真っ直ぐに私を見て話してくれたから……それに」

そこで私の手に自分の手を重ね、今までで一番の笑顔を浮かべる。

「もう1人は嫌だから……シルヴィアさんと一緒なら、私、笑えると思う。きつと楽しい。だから……私も、一緒に連れて行って下さい」

その言葉の後に、瞳から涙を流したのはどちらが先か。

「ええ、一緒に生きていきましょう。2人で、ずっと一緒に」

「はいっ」

わからぬまま、2人は微笑み、涙を流し、抱きしめあう。

2人の心を包むのは安堵と歓喜。

暖かな日差しの中、2人は共にある幸せと温もりを噛みしめながら抱きしめあった。

その後、随分話し込んだことと、抱きしめあったまま落ち着くまで待った事で、太陽の位置はすっかり真上、正午になっていた。

昨日の今日で、この辺までなら追手が来るかもしれないと、とりあえず南へ向けて、2人は旅立つことにする。

理由は特になく、暖かい方へ向かうという意味で。

それとなくエヴァの住んでいた城まで、思い出の品などを取りに戻る事も示したが、本人があっさり却下。

胸元の二つの指輪を握りしめ「私には両親のこれと、シルヴィアさんがいるから、大丈夫」と笑顔で言われて抱きしめたのは少し前の事。

なんとなく、自分のキャラが壊れていると思わないでもない。

さっきも、まさか自分が泣くとは思っていなかったわけで・・・感情移入はしていたけども。

まあ、それでもいいかと切り替えた私は、隣でオレンジジュースをちびちび飲みながら歩くエヴァちゃんに爆弾を投下する。

「エヴァちゃん、今日から私達、義理の姉妹って事にしようと思うんだけど、どうかしら?」

「!!!!ケホツツケホツ!」

うむ、予想通りの反応。そして咳き込む姿も可愛らしい。

・・・シスコンフラグ? ナニソレオイシイノ?

そんなおバカ会話を脳内で交わしていると、エヴァちゃんが再起動。

「いきなりどうしたんですか?」

若干恨めしげに、しかし頬を染めつつ上目遣いのエヴァちゃん。

・・・うむ、これは強力です。

「女の2人旅はそれなりに目立つし、せめて関係ぐらひはあり得る

ものにしようかなと思って。」

実際問題、あまり注目を浴びるのは得策じゃない。どうせ目立つにしても理由と関係の2つの好奇で目立つより、理由だけで目立った方がまだまし、という程度だけどね。

服装、というかマントとかのほろが目立つかな〜とか思うけど気にしない。

・・・そもそも内包する魔力の大きさの方が問題かしら？

「・・・そう言う事なら是非。よろしく願いしますね、シルヴィア義姉様」

「!!!ケホツツケホツ！」

水を飲もうと口を付けていたら、なにやらかなり上機嫌な声で聞こえてきたエヴァの口撃。

効果？もちろんクリティカルですがなにか？

「エヴァちゃん、いえエヴァ、あなたね〜」

「ふふっ、さっきの仕返しです」

じ〜っと見つめ合う2人はやがて同時に笑いだす。

そうして、ちらちら見ていた手を差し出して、2人で手を繋ぎ歩き始める。

これからの長い、とても長い旅を、2人で一緒に。ずっと一緒に歩んでいく。

第5話 シルヴィア姉様の教育方針と、不老の解除（前書き）

前回のあらすじ

エヴァと邂逅

事情説明

義姉妹になる

第5話 シルヴィア姉様の教育方針と、不老の解除

皆さんごきげんよう、シルヴィア・マクダウエルよ。

エヴァと義姉妹の関係となり、旅を始めて半日。

時刻はすっかり夜で、私達は今夜も野営をしている。

焚き火の脇に広げた敷物の上に寝転がる私。

腕の中には、もちろんエヴァ。

ちなみにエヴァの今の格好は、私と同じ。

ボロボロのワンピースを仕舞い、代わりに私の予備の服装を着せてみた。

マントと一緒に、勝手にサイズを調整してくれた。

ホットパンツから延びる、素足をさらす格好に恥じらうエヴァの姿もたっぷり堪能したわ（キリッ）

そんな訳で上から下までそっくりの格好な私達。

唯一違うと言えば、私の腰に刺さった短杖・短刀。

今日の昼、預けていたのを義姉妹となった時に返された。

忘れていたと言うのもあるが、私の方が扱えると言う事で。

マントのお蔭で快適に寝る我が義妹。まあ、焚き火は獣避けのため
すやすや眠る彼女を眺めながら、今後の事を考える。

とりあえず、今回の心の傷が癒えるまではたっぷり甘えさせてあげ
よう。

ただでさえ、親を失ったのだから。せめて、完全な代わりとはいか
なくても、それに匹敵するくらいの愛情を注ごう。

傷が癒えたら、徐々に自立させる。寄り添う事はよくても、依存は
よくない。・・・お互いに。

それぞれが自分の足で立つことで、はじめて共に歩むことが出来る
のだから。

徐々にそつなる事ができたらいい。

次に、彼女の力をどうするか。

私にしる、エヴァにしる、どうあっても戦う事からは逃れられない
だろう。

先日の、自称正義（下衆）の魔法使い（嘲笑）がいい例だろう。

彼女が積極的に戦うにしる、極力避けて身を守るにしる力は必要だ。

・・・と言っても、まだ早い話かしら。エヴァは10歳になったば
かりなのだから。

当面は、護身が出来る程度に体や技術を鍛える。その間は私が守る。それでいいだろう。

数年経って、彼女が精神的に成熟した時、彼女が自分自身でどういった覚悟・決断をするか。

どういった決断であれ、私は受け入れる。

戦うのなら共に戦う、逃げるのなら私が守る。その違いだけ。

私がエヴァと共に在るのは変わらないのだから。

私が覚悟を決めるのに約1年、体に染み込ませるのも含めて約10年掛かった。

その基準で言えば、まずはエヴァが20歳になるまで見守るとしよう。

過保護と取られるかもしれないが、これが私の限界だ。

私は私の幸せのために力を使う。

私の幸せの1つは、エヴァが幸せになる事。

エヴァが、そして私が幸せになるために、私は力を使う。

「あなたは、あなたの好きに生きなさい・・・どんな道であれ、私は共にいるわ。それが私の幸せ」

エヴァを抱きしめながら、いつの間にか口にする言葉。

言葉にすることで、それは自ら誓った誓約のように心に収まる。

彼女の額にキス。全身に気を巡らせて周囲の警戒をしながら、睡魔に身を任せ、瞳を閉じる。

……周囲にばかり気を向けていた私は、腕の中で動く彼女に気付くことはなかった。

そして翌朝、頬を赤らめ、きよろきよろと挙動不審なエヴァに、首をかしげるシルヴィアが居たとか居ないとか……

1週間後

追手から距離を取り行方をくらませるために、この1週間はほとんど歩きっぱなしだった。

と言っても、服やブーツの自動体力回復魔法や自動加速魔法の効果オートリジエネで、疲れ知らず+かなりの距離を稼げた。オートヘイスト

それに、合間に携行食料を作るのに挑戦したり、1度は賊が襲って

きて蹴散らしたりもした。

食糧作りには魔導書が大活躍。獣の捌き方や下処理・調理方法などもばっちり記載。グー ル先生もびっくりの情報量。もはや魔導書と言つより百科事典クラス。それでも魔法が載っているので魔導書と呼ぶ。

鳥以外の肉は燻製、魚は開いて干物に。鳥は血抜きして食糧用の小分け袋にそのまま入れる。

森に生えているキノコや野菜と煮込むと、良い鳥ガラスープになるのだ。

歩きながら野菜・果物を採集することで、食糧事情も随分改善された。

そんな風にながら距離を稼ぎ、そろそろ頃合いかと昨日は深い森の中で野営をして今日に備えた。

朝目覚め、敷物や焚き火の後始末をしようとしている義妹に声をかける。

「エヴァ、今日は旅に出ないからそのままでもいいわよ」

「何かするの？」

そう尋ねるエヴァに私はリュックから魔導書を取り出し見せつける。

「エヴァの不老の解除よ」

そう告げると大きく目を見開いた。

目を閉じ集中。意識をお臍の下、丹田に向ける。

そこにある魔力の塊を、腕に流し始める。

この1週間、歩きながら、あるいは暇さえあれば魔力の流れを意識し、全身に巡らせた。

そのおかげで、気の通り道である気脈に対して、魔力の通り道である魔脈の拡張が大分進んだ。

集積地の事は、面倒なので気・魔力共に丹田と呼ぶことにした。

気の扱いで大分コツを掴んでいたのか、すぐに魔力でも、気と同じように身体強化が出来るレベルに到達した。

あの100年は一体・・・と思わないでもないが、そのおかげですぐに上達したのだから文句も言えない。

腰から短杖を抜き、魔力を流すことでヘルメスの杖を現す。

そのまま魔力を集中、先端の水晶を中心に魔力の塊が出来始める。水晶を中心に、バスケットボールくらいの魔力が溜まると、今度はその維持だけに流す。

そうして今度は、魔導書に記載された通りに、魔力で地面に魔法陣を形成する。

描き始めた途端、魔力がどんどん吸収されるのを感じて、急いで魔力を供給する。

全てを描き終わるとようやく一息つける。慣れていないせい集中と魔力の供給でそれなりに疲れる。

地面に焼き付けられた魔法陣は、風や足跡で消えること無くそこに定着している。まずは成功のようだ。

「義姉様？」

脇に控えていたエヴァが、水筒とタオルを差し出してくれる。

さすが我が義妹、と気配りに感心し、礼を言ってから受け取り喉を潤す。

同時に魔導書に目を通し、もう一度魔法陣と内容を確認をする。

今回私が初めて描いた魔法陣は、神様が魔導書に記してくれた、エヴァの不老を一時的に解除するためのものだ。

「この後はどうするの?」

「少し文字を追加した後、エヴァが魔法陣の中央に立って、私が呪文を詠唱する。そうすると魔法陣からエヴァに鎖の様なものが出る。それが呪いを示すらしいわ。」

「鎖・・・」

「痛みとかはないみたい・・・不安?」

「ううん、平気。それで?」

エヴァをつぶさに観察しても、動揺や不安は見られないので話を続ける。

「呪いが鎖として現れた後、私が直接その鎖を引きちぎる。それで不老の呪いは一時的に解ける」

「一時的?」

「追加する文字の効果よ。年単位で、どれだけ呪いを解除するか決めておくの。5と刻めば、5年間は体が成長するけど、そのあとは鎖、つまり呪いが修復され不老に戻る、ということね。」

「ううん、義姉様の身体も不老不死だよな?何歳にしたの?」

「私はもともと、前世が22歳だったから、そのままにしたわ。姿は変えたのだけだね。」

「じゃあ、私は10年にする。そうしたら私の身体は20歳で不老

になって、いつまでも義姉様の義妹で居られるもの」

そう言い、ニコツと微笑む彼女を、私は抱きしめずには居られなかった。

「義姉様？」

「ごめんなさい。この方法じゃ、不死の方は治せないの。使う魔力が大きすぎて私ですら足りない。それにエヴァの不老不死が世界の存続に関わる事、そして吸血鬼の真祖ハイ・テイライトウォーカーと言う種そのものが、この人間界の根幹に根ざしている以上、無理に治そうとしても世界が介入して邪魔をする……ごめんなさい」

如何に地球5個分の力を持つと、相手はこの世界、人間界そのものの。

正面からぶつかれば、惑星どころか銀河すら手中に収める世界にはさすがに適わない。

恐らくだが、原作開始前に主人公である薬味をどうにかしようとしても、かなり強力な介入が予想される。

物語が始まらなければ、終える事が出来ない。それでは人間界としての存在理由が満たせない。

それだけならまだしも、エヴァの呪いは吸血鬼の真祖ハイ・テイライトウォーカー。

それが世界の根幹に根ざしているため、原作開始後に呪いを解こうとしても、それすらも拒否される。

自分の無力感に沸々と怒りが沸き起こる。

如何にどうしようもないことだとしても。これだけの力を得てなお、目の前の義妹1人救えない。

そんな怒りに飲み込まれそうになる私を、エヴァは正面から抱きしめる。

「謝らないで、義姉様。そんなこと言わないで」

「え？」

「確かに最初は、悲しかったよ？人以外の存在になっちゃったんだって。でも今は感謝する事も出来るの」

「感謝？」

そう問いかける私に、エヴァは顔を上げまっすぐ見つめてくる。

いつか私が、彼女に心を伝えようとした時のように。

「この呪いのお蔭で、私は義姉様に会う事が出来た。この呪いのお蔭で、義姉様と一緒に歩くことが出来るんだから」

そう言い放つ彼女は、本当に10歳の少女なのか疑う。

それくらいの力強さを持っていた。

すると一転、おどけた悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「もちろん、私に呪いをかけた造物主とかいう人には、きつちり仕返しするけどね。父様や母様、皆の仇も取らないとね」

そうやって笑みを浮かべる彼女を眺めていると、私も笑みを浮かべる。

まったく、自分の弱さが恥ずかしい。

精神的には100年以上生きているはずなのに、まだ10年しか生きていない義妹に教えられるなんて。

エヴァ自身、呪いや両親の事含め、まだ完全には割り切れてないはずなのに。

守る側であろうとした自分の方が氣遣われている。

情けない自分に苦笑しつつ、次から氣をつけようと、これもまた寄り添う関係の1つではないかと、氣持ちを切り替える。

「そうね………ありがとう」

そう微笑み、抱きしめる。

エヴァも抱きしめ返してくれる。

それはまるで、これで良いのだと伝えているようだった……

しばらくして、落ち着いた私は儀式を再開する。

エヴァの願いどおり、10の数字を魔法陣に刻み、エヴァを中央に立たせる。

「いくわよ・・・いい？」

「うん・・・」

さすがに若干の緊張を見せるが、儀式を続行する。

「『我、汝が背負いし魔を払う者！今ここに我が命ず！汝が魔を眼前に現せ！』」

膝をつき、魔法陣に手を触れながら魔導書に記された通りに詠唱する。

神様直々の魔法のせいか、始動キーはなかった。

そうして唱え終わると、魔法陣が強く発光。

そして陣のいたるところから、エヴァに向かって鎖が伸び、体に絡まる。

その数10本。

「エヴァ、大丈夫？」

「うん、私は平気・・・でも体は動かせない」

そうして鎖の絡まった体を動かそうとするも、びくともしない。

・・・一瞬、不埒なことを考えたりなんかしてないわよ？

ともかく、光が収まると私はさっそく鎖の1本を手取る。

全身に魔力を流し、強化する。

ももとの魔力量が、人基準ではありえない量のために出来るこの儀式。

体にもどんどん魔力を流し、力で無理やり引っ張る。

「・・・あれ？」

そこにはぼろぼろの鎖。

なんだか拍子抜けするくらい簡単に壊れた鎖が手にあった。

ふとエヴァに視線を向ける。

「・・・」

「・・・」

なんとも気まずい空気を無視するように、他の鎖に向かった。

「これで10年間は、普通に成長するんだよね？」

私と一緒に隣を走るエヴァがそう問いかけ、私は頷いて答える。

その後、あっさり全ての鎖を破壊した私達。

これでエヴァの不老は一時的に解け、10年後までは成長を続ける。

その後は不老に戻り、ずっと20歳のまま、という訳だ。

私達はそのまま1日過ごす予定だったのだが、すぐに片付け旅立った。

と言うのも、儀式中に使った魔力が思ったより大きかったので、近くに魔法使いがいれば魔力の流れによってばれた可能性に思い至ったのだ。

そこですぐさま移動を開始。

ブーツの自動加速魔法オートヘイストの効果も利用して、すでに大分距離を稼いだ。時刻は夕方近くになっている。そろそろ今夜の野営地を決めないと。そんな事を考えていると、隣のエヴァが私を見ている事に気付く。具体的には私の胸を、だ。

「ふふっ、羨ましい？」

マントから覗く、ローブを押し上げる胸。

その胸を持ちあげからかう……

「うん……私も義姉様みたいに綺麗になれるかな……」

つもりが義妹のピュアな口撃にあっさりやられました……やるわね我が義妹よ。

「ええ、エヴァならきつとなれるわ。体の成長は大体15歳くらいからかしら。個人差で前後もするけどね」

そう……成長する事ができるのだ。

それだけでも、いいのではないか。

何もかも私が背負い込む必要はないのだ。

今の時点ですでに、ただ守られているだけの存在ではないのだ、こ

の義妹は。

だから私も、自然でいればいい。

気負うことなく、自然に2人で歩いていけばいい。

そんな事を思いながら、エヴァと共に走り続ける。

第5話 シルヴィア姉様の教育方針と、不老の解除（後書き）

展開が遅い？ 終わり方がマンネリ？

キノセイダヨ？

第6話 シルヴィア先生の魔法講座（前書き）

前回のあらすじ

エヴァの今後の教育方針と覚悟
エヴァの不老の解除

第6話 シルヴィア先生の魔法講座

皆さんごきげんよう、皆の義姉様・シルヴィアよ。

我が義妹・エヴァの不老を解除し、行方をくらませるために走り去り数日。

そろそろ良いかと適当な森を見つけ、その中心地で野営をしたのが昨夜。

起きて顔洗ってご飯を食べて・・・出発の準備をするエヴァに声をかける。

「エヴァ、今日は旅に出ないからそのままでもいいわよ」

そう言うと、エヴァは可愛らしく首をコテンと傾げる。

うむむむ、今日も我等の最終決戦兵器は絶好調のようね。可愛いわ。

そんな事を思っていると、今度は「うん」と悩みだした。

まあデジャブを感じるのも無理はない・・・

「コピペ?」

・・・・・・今日も我等の最終決戦兵器は絶好調のようね。

義妹よ、電波受信のスキルを得たの?それは頭に太陽の塔みたいな人形乗せてないとダメよ?

そんな義姉妹のじゃれ合いを終えると、敷物の上で、正座で向き合う。

最初は戸惑ったエヴァも最近は慣れてきた。

二人の間には魔導書を置く。

「さてエヴァ。突然だけど、今日から修業を始めるわ」

「修行？」

「ええ。私達が旅をする上で、どうあっても危険からは逃れられない。それは突発的な賊だったり、私達の力を恐れ、人ならざる者として害そうとする魔法世界の関係者だったり。」

「・・・」

「積極的に戦うにしろ、逃げるにしろ、身を守るための力が必要だわ。そのための修行よ」

「……うん」

「と言っても、しばらくエヴァは修行するだけ。実際に戦うのは私よ」

「え？」

「よく聞いて、エヴァ」

そこで言葉を区切ると、エヴァの肩に手を乗せ正面から見つめる。

「力には選択の責任が伴い、それを受け止める覚悟が必要よ」

「責任と……覚悟」

「そう。なぜ力を使うのか？それを使うことを選んだとき、力を使った結果に対する責任。そして、その結果を受け入れる覚悟がね。」

「……」

「私は、私と私の大切な者のために生きる。そのために力を使う。そういう覚悟を持っている。その為に必要ならいくらでも力を使う。邪魔する人間を殺す事も躊躇しない。」

「たとえば、エヴァ1人と無関係な人達1000人、どちらかしか助ける事ができないなら、私は迷わずエヴァを救う。その結果1000人の人間が生きようが死のうが構わない。そして、見捨てた1000人や、その身内から恨み辛みその他の責めを向けられたとしても、私はそれを認め、負う責任と覚悟がある」

「……」

「勘違いしないで欲しいのは、それら全てはエヴァのためだけど、エヴァのためだけじゃない。私自身のためでもあるの」

「義姉様の？助けられるのは私なのに？」

「そうよ。私の幸せはエヴァと共に在ること。だから、私は私のために力を使っていることになる。それに私は、人殺しの理由を義妹に押し付けるつもりはない。あくまで私の幸せのため。そして、私にとって無関係な人間なんて路傍の石以下の存在。そんな存在のために命を懸けて謝罪するような、『責任を取る』なんてことはしない。私の言う責任とは、あくまで自分が行った行動の結果を認め、受け入れ、背負う事。『責任を負う』と言う事よ。・・・そうして責任を負いながら、私と私の大切な者のために力を使う。それを貫くのが覚悟よ」

「・・・」

「力を身に付けるのと同時に、私の言った事も、考えてみて頂戴」

「うん・・・」

エヴァを見つめれば、私が一気に語った事を必死に考え、心に刻み込んでいる。

・・・いつかは、彼女も決断するのだろう。

しかし・・・たとえそれが無理だとしても・・・もうしばらくはその時が来ないで欲しい。

義姉の立場としての勝手な思いを抱きながら・・・義妹を見つめていた・・・

少し時間をおいてから、今日の本題に入った。

「最初に、修行の方針を伝えておくわ」

「方針？」

「ええ。これから私達は、魔法に加えて体術・剣術、それとそれぞれ別々の技術を1つ習得することを目指すわ。それも同時進行で。」

「一杯だね・・・それよりも別々の技術って？それに同時進行？普通は1つを極めてからじゃないの？」

「最初の3つは基本戦闘に外せないとして、それぞれ違う事が出来た方が戦術・戦略としての手札も増えるでしょ？同時進行は、魔法を極めている途中に魔法が効かない相手が出てきて困った、なんて事がないように。まあ、当面は私が戦うのだし、私の場合、剣術は多少かじっているから、魔法から極めてもいいのだけど・・・時間は有効に使わないとね。私は魔法具作成に興味があるのよね」

「なるほど。別々の技術か……あ、これ」

そう言いながら魔導書、もといグール辞書のページをめくっていたエヴァの手が止まる。

そこに記されていたのは『人形使い』のページ。

「これ、おもしろそう」

エヴァの視点から言えば魔法で人形を動かすファンタジックな物だらうけど。

私としては世界の、物語の力を思わないでもない。

「まあ、決めるのはすぐじゃなくても良いから、気に入ったのを探すといいわ。今日は魔法を基礎から学ぶわよ」

「うん！」

そう返事をする義妹と共に、魔導書をめくっていく。

それによるとこうある。

魔法とは、世界に満ちるマナを体内で魔力に変換。それを精霊に渡すことで魔法として具現、行使する。

変換するのは丹田で間違いない。世界に満ちる、の意味は、生きとし生けるものが持っていると言う事。命とも取れる。だからこそ人が食事や睡眠を取る事で、魔力の回復を図る事が出来る。

こうして見ると、生命力による『気』が人の内部的の力とするなら、外部の物を食する事でも得ることが出来る『マナ』魔力』は外部的な力と見る事が出来る。

また、気や魔力は人の根源的・感覚的な部分にも繋がるので、気配などとして察知されることにも繋がる。

エヴァが吸血鬼ハイ・デイルイトウォーカーの真祖に覚醒した時、城近くの町に居たローブの下衆が察知したこともこれで説明がつく。

もつとも、近くとは言え離れていた町に居た下衆に察知されたのは、覚醒直後で魔力が溢れていたのも理由だろう。

でなければ、私達2人の魔力量を考えれば常に察知され襲われることになる。

如何に膨大な魔力であっても、よほど近づかない限り何らかの流れ、たとえば魔法を行使するなど消費・変動が起きなければ察知はされにくいらしい。

もちろんその感度も術者の技量によるようだ。

次に書かれているのは魔力障壁について。

魔法使いの基本的防御手段。文字通り魔力を込めることで盾として形成。便利なのは、一度作れば自ら破壊するか他者に壊されるまで勝手に展開されている点。作る時だけ魔力を消費するのだから、自動防御が可能と言うことだ。防御力は本人の技量と込めた魔力量に左右されるようだ。

「これは重点的に行うべきね」

「防御の方法なのに？義姉様にしては意外かも」

・・・義妹にどう思われているかの一端が見えたようだ。

それは置いておくとして・・・

「障壁を磨けば、それだけ魔力制御を磨くことにもつながるわ」

「魔力の制御？」

「ええ。たとえば制御力が低いころは、10の固さの盾を作るのに20の魔力を使ってしまう。でも制御力が上がれば、10の盾に対して8の魔力で済むようになる・・・どっちがお得かわかるわね？」

「そっか・・・だから制御力は重要なんだね」

「それにね、エヴァ・・・力を制御できない者は、力に飲まれるものよ」

「力に・・・飲まれる？」

「ええ。自ら振るう力に滅ぼされるの。だから力を振るう時には、それ以上の制御する力と制御する心、理性を持たなければならぬ。」

「制御と、理性・・・」

「ええ、覚えておいて」

「うん・・・」

義妹に語りながらも、内心は自分自身への戒めでは無いか、と苦笑する。

私自身の経験では無いが、過去歴史上から学んだのも事実。

自らの幸せのために振るう力で滅ぼされれば世話はない。

そんなことにはならない・・・させない。

そう心に刻みながらページをめくる。

次に書かれていたのは、魔法の具体的な体系についてだ。

威力の低い方から、詠唱魔法・術式魔法・術式詠唱魔法、となるらしい。また、この体系とは独立して無詠唱魔法と言うのも存在する。

詠唱魔法はもつとも基本的な魔法で、原作にもあるように始動キ―

から始まり、呪文を詠唱することで発動する。

術式魔法は、魔力によって魔法陣を形成し、その中で特定の鍵となる行動「陣の中に入る・陣の中で魔法を使う、などから発動する。畏に近い魔法だ。

術式詠唱魔法は、文字通り2つの体系を合わせたもの。魔力で魔法陣を形成し、詠唱によって魔法を発動となる。

無詠唱魔法は、これらの体系の中で詠唱を破棄して魔法を発動する事を言う。基本的に詠唱破棄の効果で本来の魔法より威力は落ちる。しかしながら、これら4体系すべてに言えることは、魔法使い本人の技量「制御力によって威力は左右されると言う事。

技量1の魔法使いが放つ術式詠唱魔法と、技量10の魔法使いが放つ詠唱魔法なら、後者が勝つ。

技量10の魔法使いが放つのが無詠唱魔法でも同じ結果になる。

こうして見ると、やはり魔力制御の重要性が伺える。

間違ってもくしゃみ一つで服を吹き飛ばすような奴を魔法使いとは言わない。

誰の事とは言わないわよ？

そんな事を考えながら、エヴァには更に噛み砕いて説明。制御力の重要性を強調する。

元々聡明なエヴァもどんどん吸収していく。

そうしてよいよ具体的な魔法が記載してあるページに辿りつく。

「……？」

「どうしたの、義姉様？」

「いや……ちょっとね」

魔法の記述は、最初に生活にも使うような基本魔法が載り、その後属性ごとに並べられ、何ページにも渡って書かれている。

この世界の属性は8つ。火・氷・風・土・雷・水の6属性（左から右に強い関係を持つ、水は戻って火に強い）と、反発しあう闇と光の2属性を合わせたものだ。

ちなみに、エヴァが原作で作り上げた『闇の魔法』と『闇属性魔法』は別物のようね。

とりあえず基本魔法は覚えるとして飛ばし、記述は火属性、基本の『魔法の射手』から始まっていた。

それはいいの。問題は別よ。

『火属性下級魔法・ファイア』

……はい？

何故ここにFF魔法が？ネギまの世界に？

混乱しかけた私は、しかしある事を思い出す。

それは神様の言葉。

「『うむ、いくつかの要因が混ざり合った結果、原作にある事が無かったり、逆に無い事があったりするようじゃな。』」

これか！今まで原作通りだったから油断していたわ。

でもまあ、FFは好きだし、いいかとあっさり切り替える。

それにFFの魔法が使えると言うのはなかなか心に響くものがある。とりあえずおいといて、それぞれが得意な属性を見極めることにする。

これには『魔法の射手』を使う。

単純に1の矢を撃てるかどうかで適性がわかるらしい。

結果は・・・

私：全属性（特に雷・闇）FF魔法

エヴァ：氷・闇

・・・全属性って・・・そりゃチートだけでも。

エヴァは原作通りだった。ちなみにFF魔法は下級を一通り試してみたが駄目だった。

FF魔法は私だけと言う可能性もある。なにせ世界の外からやってきた存在なのだから。

「とにかくこれで決まりね。魔法は基本魔法と魔法の射手に集中。サキタ・マギカ私は雷と闇、エヴァは氷と闇ね」

「制御力を上げるため？」

「そうよ」

早い話、制御力を上げて魔法の射手で弾幕を張れば、力押しで大抵の魔法使いは行けると思う。

ただでさえ私のチート魔力に加え、エヴァは吸血鬼の真祖としての膨大な魔力。ハイ・テイルライトウオーカー

弾幕そのもので倒せなかったとしても、その隙に接近して斬り殺せばそれで済む話。

当面はこれでいいわね。

「それじゃあ、さっそくはじめましょうか」

「うん！」

そうして私達は、魔導書片手に魔法の修行を始めた。

第6話 シルヴィア先生の魔法講座（後書き）

エヴァのシルヴィアに対する呼称を義姉様に修正しました。ねえさま、です。ぎしさま、ではありません。あしからず。

次回更新は少し間が空きます。申し訳ありません。それでは、また。

第7話 理性と本能（前書き）

前回のあらすじ

修行の方針決定

魔法講座

注意

R15描写あり。ご注意ください。

第7話 理性と本能

「・・・知らない天井・・・はお約束かしら」

ふと、目が覚めた。

視線の先に広がるのは、旅の途中に訪れた宿屋の天井。

視線を少しずらせば、窓から差し込むのは月が放つ蒼き光。

月以外の全てが眠る、そんな深夜。

蒼き光と相まって、部屋を包むのは静寂・・・のはずだった。

「ふふっ・・・まだ残っているわね」

そんな静寂を打ち壊すのは、汗と女の、否、雌そのものの匂いが混ざり合った、淫靡な香り。

鼻から吸い込まれたその香りは、目覚めたばかりの脳髓を溶かし、先ほどまでの行為を思い出させ、体を火照させる。

その元凶の片割れに視線を向ける。

私の腕を枕にし、裸の身体を抱きつかせているのはエヴァンジェリン・マクダウエル。私の愛しき義妹。

美しき裸体は出会ったころよりも成長し、女らしさを醸しはじめてきた。

少女から女性へと成長する台間の、ある種アンバランス、インモラルな美しさ。

幾分大人びた表情も、今はすやすやと穏やかな寝顔。

先ほどまでその表情を、優しく、荒々しく、滅茶苦茶に翻弄する快感に歪め、汗と嬌声を撒き散らし崩していたのが嘘のよう。

思い出しただけで、体の奥が官能の火でじりじりと炙られるのを感じる。

今の私は笑っている。

瞳を、口元を淫蕩に歪ませ微笑むさまは、他者の夢を貪り精を吸い取る、淫欲を司る夢魔そのものかもしれない。

・・・エヴァと出会いもう5年になる。

たった5年で、色々な意味で大人にしてしまった自分に少々あきれる。

かといって、自らの本能を止められるとも思わないし、止めようとも思わない。

同姓の、年下の、年端もいかない、義理とはいえ義妹を、貪る自分。

・・・レズ・ロリ・シスコン・近親相姦。

・・・もう魔王でいいわね。

そんな事を考えながら、手はいつの間にかエヴァの頬を撫でていた。

「義姉様、待って」

エヴァと出会って3年、今私は森の中で、女2人に欲望を刺激された下衆な賊と言う名のゴミを『お掃除』しているところだ。

ついこの間エヴァの13歳の誕生日を迎えた私達は上機嫌で旅を続けていた。

そんなときに無粋な客の来訪で、少々手際が乱暴だったかもしれない。

最後の1人（脚を斬られて逃げられない）を片付けようとした私を、義妹が止める。

どうしたのかと振り返れば、その深紅の瞳が真っ直ぐに私を射ぬく。

それだけで、私は理解した。……………理解してしまった。

「……決めたの？」

「うん」

「後悔は？」

「ないよ」

「そう……」

短い言葉を交わすと、私は血を払った正宗を短刀に戻し脇によける。同時に、依然賊から奪った長剣を抜き放ち、エヴァが賊の前に出る。

「ま、まっ……」

そうして目の前に立った瞬間、命乞いをしようとした賊の首を斬りおとした。

体に馴染ませた動作で、斬りおとした直後に間合いを広げ、次に備える。

首が落ち、血が噴き出して数秒、体も崩れおちる。

そこでようやくエヴァも血を払い、剣を納める。

私はそんなエヴァを後ろから抱きしめ、囁く。

「慣れてはダメ。忘れてもダメ。……でも抱え込んでダメ。わかる？」

「……(コクッ)」

体を震わせながら、それでも声を漏らさず頷く義妹を、私は抱きしめることしかできなかった。

エヴァの手が、私の腕を握りしめる。

これでいい。

私はエヴァと共に歩む。ならば彼女の決断や覚悟も受け入れる。

この所、私が殺しをするたびに深く考え込んでいるのは知っていた。

私個人としては、もうしばらく子供でいてもいいのでは、と思っていた。

しかしそれが義姉としての傲慢や押しつけならば、そしてエヴァ自身を選ぶのならば、それに否はない。

必要なのはこうして、共に支え合い歩んでいく事。

だから今はこうしてそっと泣かせ、見て見ぬふりをしてやればいい。

そう思いながら、抱きしめ続けた。

「義姉様、私を抱いてください」

そう告げられた私の目の前には、いつものおそろいの格好ではなく、初めて会った時着ていたのに似た、黒のワンピースドレスに身を包んだエヴァが居た。所々あしらわれたフリルや飾りがより可愛らしさを引き立たせる。

今日はエヴァの14歳の誕生日。

立ち寄った街の宿屋に泊り、その料理に加え持ちこんだ食材でいつもより豪華な夕食を楽しんだ。

珍しくワインも開けて、2人で飲みながら楽しく話していた。

ワインを数本あけて、夜も深まり、そろそろお開きかと会話が途切れた合間を縫ってエヴァが言い放ったのだ。

その時の私の感情は、間違いなく歓喜だった。

禁忌の関係？危ない性癖？だからどうしたというの。

貞操観念や倫理その他諸々が厳しかった前世ですら、色欲に関して本能的に忠実に生きていた私が今更足踏みをする訳が無い。

まして、まったく予想して無かった訳でもない。

話は半年ほど遡る。

エヴァの13歳の誕生日。初めての殺し。それから半年。

その日、少し疲れたとエヴァは先に宿に向かった。

私は町を回ってから宿に向かう。

薄々気づいていた私は、宿に向かう瞬間から気や魔力と言った気配を消して向かった。

宿に入ると聴覚を強化し、足音を消しながら部屋に向かう。

幸い今日の客は私達だけ。廊下に居ても不振に思われることはない。

そうしながら部屋の前につき、扉の横の壁に体を預ける。

「はっ……ん……くう……ああ……んん！」

静かな宿屋ですら漏れ聞こえるかどうかという小さい、しかし気で強化した聴覚ならはつきり聞き取れる吐息と布ずれ、ぴちゃぴちゃと響く水音。

部屋の中で何が行われているか予想がつき、それが現実だとわかった時、義姉としては少々ほろ苦く、それでも義妹の成長を嬉しく思

っていた。

もとより、性などに興味を覚え出す年頃だ。

まして彼女の手は血に濡れている。

古来より兵と呼ばれるものが女性などに暴行・強姦などの問題を発生させるのは、戦場と言う非日常・異常性が生存本能を刺激することと起こる。種を残そうとする本能が、性欲などとなって表れる。

色を好むから英雄なのではなく、多くの死に塗れた英雄だからこそ、精神のバランスを保つためにも色を好むのだ。

エヴァもまた、13歳という若さで死に塗れている。

とすれば興味がある事も相まって、手を出すのも無理からぬこと。

それで健全な精神状態が保てるのだから、なんら問題はない。

元々性にオープンな私はそんな事を考えていた。

「しるっ・・・ん・・・ヴいああ・・・ねえさまっ」

その声を聞くまでは。

エヴァのその声を聞いた時、私は頭をハンマーで殴られる衝撃、と言つのを初めて感じた。

あの義妹が、私を妄想の元にして、自らを慰めている。

背筋をゾクゾクと電流が走る。体は火照り、興奮と欲情に彩られる。

その瞬間理解する。そして自分に枷を付ける。

いずれ今の、義理の姉妹というだけの関係は崩れ、新たな関係を築く時が来る。

それまでは、私の方から手を出してはいけない。なにより彼女のために。

そう戒めながら、両手は興奮に張った胸に伸びる。

ブラウスの上から触れた瞬間、声をなんとか押し殺し、乱暴にもみし抱く事を止めることはできなかった。

私とて、肉体年齢は22歳のまま。肉体に引つ張られるのか、神様の所で100年経っても、年寄り思考になる事はなかった。当然欲望に関わる部分も年相応ってこと。

エヴァと会ってから3年半、自分で慰めた事も何回もある。

それでも、これだけの快感を得たことは無かった。

義妹をネタに自らを慰める義姉・・・浅ましい女ね。

頭の中で冷静な私が、私を罵倒する。

現実の私は、唇をぺろりと舐めて、妖艶に微笑み言い放つ。

「うづやましいでしょ」

頭の中の私と言う常識は消えさり、後は義妹の嬌声をBGMに自らを慰めることに集中するだけだ。

そんなことがあってから半年。

14歳の誕生日を迎えたエヴァの言葉と言っわけだ。

だから私は立ちあがり、エヴァを抱き寄せ、無言で口づける。

エヴァも答える。

今更2人に、確認の言葉など要らない。

愛し愛され、相思相愛。それだけでいい。

最初は軽く、触れ合うようなキス。

やがて徐々に深く。貪るように。

舌と舌が絡み合い、ぴちゃぴちゃと音を立てる。

音は耳から2人の脳すら誘惑し始め、さらなる興奮を誘う。

エヴァを抱きしめたままベッドに向かい、そっと押し倒す。

互いに服を脱がし合い、さらけ出された裸。

エヴァの美しい、新雪の様な体の隅々に、私の証を刻んでいった。

・・・あれから1年。今日はエヴァの15歳の誕生日。

つい先ほどまで激しく交わっていた今日の主役はすやすやと夢の中。

そんな彼女を腕で抱きしめるのは、その主役を徹底的に責め抜いた私。

・・・この1年、はつきりいつて墮落の一言に尽きるわ。

暇さえあれば互いに求めあった。

宿だけでなく、外の野営でも構わず交わってたわね。

お蔭で認識阻害や防音と言った基本魔法の技術も上がったもの。

特に、下衆な賊や魔法使い共を追い散らし（殺し）た後は激しい。

1日中していたことも、一度や二度じゃないわ。

おまけに私の性癖の影響でアブノーマルなプレイもしちゃうし。

またエヴァもそれを受け入れちゃったという……。

そんな事を考えながら、頬の手はいつの間にかエヴァの首元に。

さわさわと猫を撫でるように愛撫する手。……その手に時折力が入りそうになるのを感じる。

「……いいですよ」

自分の悪癖に苦笑しようとしていたら、目の前で眠っていたエヴァが突然喋り出した。

「義姉様の好きにしていいいんです。それが私の幸せなんですから」
目をゆっくり開き、深紅の瞳を向けながら、彼女は微笑みそう告げる。

いつも私が言うような言葉を添えて。

その言葉に、どくどくと血の流れる音すら感じながら、首に当てた手の力を強めてしまう。

私自らも認める、悪癖ぎりぎりの困った性癖。というか人によっては直で悪癖ね。

破壊衝動にも似たそれは、深く愛した故に、壊れるまで愛したい。

そんな狂気の衝動。

別に本当に殺したい訳でも壊したい訳でもない。ましてヤンデレとかでもない。ただ愛したいだけ。

興奮した精神が、サディストの性癖をさらに暴走させたもの・・・と私はとらえている。

前世ですら、一番長い、中学からの付き合いの女性1人を残し、隠してきた衝動。

「ふふつ、義姉様の眼、赤くなりましたよ？興奮してくださってるんですね」

エヴァの両手が私の頬を愛おしげに撫でる。

彼女の言ったとおり、私の両目は魔力を流して魔眼を発動しなくても、ある程度の興奮状態に入ると、普段のサファイアブルーからエヴァと同じく深紅の瞳に変わる。

「またさつきみたいに、気が狂うまで絶頂を寸止めします？それとも頭が真っ白になって焼き切れるまで逝かせてくれますか？ああ、お尻もいいですよ」

そうやって、いくらか普段よりも早口で、しかしはっきりと告げ、私を煽ってくる。

この1年で、すっかり私に染められ始めたエヴァ。

私自身、それを止めるつもりもない。

まだ幼い？判断がつかない？状況を利用して刷り込んだ？そんな戯言は全くの無意味。

私達は出会い、愛し合った。それだけ。

理性も倫理もかなぐり捨てて、私達のしたいようにする。

エヴァには名実ともに私の生涯のパートナーになってもらう。

そんな彼女が煽ってくる。受け入れてくれている。

時折こうして、口で主導権を握ろうとしてくる。

だから私はそれに乗るの。

手に力を込めて、彼女の呼吸を阻害する。

息の苦しくなった彼女は顔を赤らめ、唇から涎を垂らしはじめる。

でもその瞳だけは、とろんと蕩けているの。

・・・これでまだ処女なのだから、自分の鬼畜魔改造ぶりに驚く。

そういえば、魔法で肉体を一部変形させるものがあつたはず。

それを利用すれば念願のあのシチュを作りだす事も・・・そうすれば『私自身』でエヴァの処女を・・・

そんな思考を飛ばしながら、それすらも次の瞬間には放棄して私は

エヴァの耳元で告げる。

「全部よ」

「! ! ! !」

私が告げた瞬間、体をひくひくと痙攣させるエヴァ。

私の一言でこれからの自分を予想して、達したのね。

まったく、自分の調教ぶりに呆れるわ。

・・・けどやめない。やめられる訳が無い。

そんな事を思いながら、私はエヴァを抱き寄せ、キスをした。

第7話 理性と本能（後書き）

私用で更新が遅くなりました。申し訳ありません。

・・・内容についての苦情は受け付けませんよ。

まだまだ生温いのか、やりすぎたのか。

にじふあんのにまだまだいけるのか、按排がわかりません。

今後は、今回のように時間軸が飛び飛びで進みます。今回のように前後を行ったり来たりはあまり無いように進めたいと思っています。

苦情は受け付けていませんが、感想は常時受け付けております。

我儘作者で申し訳ありません。

それではまた次回。

第8話 修行（前書き）

前回のあらすじ

出会ってから5年後、5年間の回想

エヴァの決意

初体験

義姉の狂気と、染められた義妹

第8話 修行

カンツ！・・・キンツ！キキン！ギギギ・・・カァン！

「はあっ！」

「まだまだ！」

皆さんごきげんよう、シルヴィアよ。

今私達は、人の来る気配の無い森の中で修業中。

事の発端は昨日。エヴァの15歳の誕生日から数日移動した旅先の町で泊まった宿でのことだ。

「義姉様、明日は1日、修行しましょう」

つい先ほどまで楽しみ、後は眠るだけという状況。

2人で抱き合いシートにくるまっっていると、我が愛しき義妹がそんな事を言い出した。

「1日中とは珍しいわね。どうしたの？」

「最近の私達、少々墮落し過ぎだと思っんです」

うむ、とつとつ気付かれてしまったようね。

まあ、暇さえあればしていたのだし、遅かれ早かれなのだけど・・・

「べ、別に義姉様とこつという事をするのが嫌だと言つ訳では無くてですね・・・むしろ私は、好き、というか」

「・・・」

「でもですね！私まだまだ弱いし、もつとがんばって修行して、強くもならなきゃだし」

顔を真っ赤にして私が誤解しないように説明したり、小声でちよつと惚気てくれたり。

とりあえず、何この可愛い生き物？可愛いは最強！

そついで叫びながら、腕の中のエヴァを抱きしめ、うりうりする。

「ちよつ、義姉様？」

「わかつたわ。あなたがそこまで言つなら、明日からしばらくは修行に当てましよう」

「？はい！」

きよとんとしながらも、私の言葉に元気に答え、胸に顔をうずめる我が義妹。

それじゃあ私も、明日に備えて寝ましようか。

・・・まあ、寝る前に少し悪戯するかもだけどね。

その後、抱きしめた手でやんわり撫でまわされ悶々とする義妹さんがいたとかいないとか・・・

そんなこんなで日が昇ったかどうかという早朝から宿を出て、森で修行中と言うわけ。

まずはいつも通り、基本として剣術から始めた。

私は正宗、エヴァは賊から奪った長剣、片手剣で戦っている。

何度も斬り結び、間合いを取り、再びぶつかり合う。

エヴァの剣術は、本人の希望もあり私が修めている日本刀の剣術を目指してきた。

そもそも西洋剣術にあるような、『叩き斬る』剣術はこの先あまり活躍しないわ。

鎧を着た騎士が主流だった時代に比べ、これからは銃が発達し、それを使う人間自身は軽装となっていく。

なら戦闘において必要なのは、服と肉を『斬る』ということ。

別に鎧に変わった服や肉を『叩き斬る』までしなくとも、ただ『斬る』だけで運動量は落ち、手堅く止めを刺せるもの。

重要なのはその一撃を確実に叩きこめるだけの『早さ』と、確実に『斬る』技術。

当面は日本刀剣術を2人で極め、『斬る』技術を身に付けることを目標に修行を進めてきた。

極めたその後は『早さ』や、派生して『受け流し』も求めていく。

完成形としては、不死の元同僚や大タコ、タコ男やかつての恋人が出てくる、あの有名な海賊映画シリーズの戦闘シーンを思い浮かべてちょうだい。

使う得物もそれに合わせて、カッタラスやサーベルを考えている。

西洋剣の基本である両刃・直剣から外れたカッタラスやサーベルは、片刃・反りがある・刀身が細く軽いという特徴から、日本刀に近く、目指す剣術に打ってつけだからよ。

護拳という、剣を握った拳の一部や全体を守るガードも付いていて、いざという時殴るのにも使えるから便利だし。

どちらにしる、使う得物は私が魔法具作成の技術を習得したら作る予定だから、切れ味・耐久力共にチートの魔剣となる予定。

まあ、別にそのまま日本刀を作ってもいいのだけど、まだこの時代ヨーロッパに日本刀は知られていないから、腰から下げていて変に

注目を浴びたりするよりは、こちらの剣を使った方がいいという判断よ。

「考え事ですか、義姉様！」

キンツ！カアン！

少々長く考え込んでいたらしく、その合間にも打ち込んできていたエヴァが攻勢に出始めた。

「ええ、少し。今夜どうやってエヴァを可愛がるつもりかと思って」

「な！／＼／＼／＼／＼／」

カーン！ザクッ！

私の言葉であっさり動揺したエヴァの剣を斬り飛ばし、首筋に正宗を当てる。

「うっうう~~~~」

「はいはい、可愛い顔で睨んでもだめ。次、行くわよ」

地面に刺さった剣を回収したエヴァに向かって、今度は私から向かっていく。

「はっ、やあ！」

ドシンッ！

「……やるわね、エヴァ」

「えへへ」

地面に放り投げられた私がその声を掛けると、エヴァが照れながら手を差し出してくれる。

私はその手を取ると立ち上がり、再び向かい合う。

剣術の次は体術の時間。

体術では、柔術を極めることにした。

相手の力を利用し、受け流し、はね返す。原作のエヴァも修めたいように相手の力を利用するこの体術は、何らかの事情で自分の力が封じられた際にも有用だから、ほぼ即決で決めたわ。

「……相手の力で相手を倒す。おちよくるのにも使えるかな？なんて考えてないわよ？」

柔術って、日本古来の武術の一部総称らしい。合気道とかもこれに

含まれるとか。

そんな訳で全く素人の私達は、魔導書片手に型を覚え、いくつか身に付けたら模擬戦で試す、を繰り返してきた。

最初のころは素人全開だったが、これでも修行を始めて5年経っている。

今ではそこそに見られるレベルにはなっている・・・と思うわ。

実際はその道を極めた人間が居ないから、いまいち完成度がわからないのだけど。

まあ、時間だけはたっぷりあるから・・・あせらず行きましよう。

「ケントウム・ウーヌスヒリトゥス・グラキオキエタテス・サギテント・イニクム 氷の精霊、101柱、集い来りて敵を射て！魔法の射手・連弾・セラエス
グラキアーリス 氷の101矢！」

ヒュヒュヒュヒュヒュッ！ザクツザクザクザク！

朗々と紡がれた詠唱が、精霊との契約となり魔法として具現する。

放たれた101本の氷の矢が、目標にした大岩に突き刺さる。それはまるでハリネズミのよう。

この5年、魔力の制御と出力・効率アップに重点を置いて修行してきた。

その成果として、無詠唱で51本、詠唱有りなら101本まで射出できるようになったわ。

更に言えば、その1本の攻撃力は、普通の魔法使いの3本程度に匹敵する。

その代り、魔法サギタ・マギカの射手以外の攻撃魔法はまだ覚えていないのだけど、認識疎外や防音と言った、生活に使える基本魔法と、制御などを合わせる、それだけでかなりの時間を取られてしまったのが原因。

まあ、それでも十分な威力を確保できていると思うわ。

……時折遭遇する魔法使い（嘲笑）達が、詠唱有りですら本程度なのは気のせいよね。

私達2人はチートだし、たった5年で威力換算300本とかまだまだ序の口よね。

……うん、序の口よね。

「ふう、さすがに疲れましたね」

時刻はすでに夕方。もうそれほどせずに日も沈むだろう。

そんな夕焼けの中をエヴァと手を繋ぎ帰路についている。

もう街は視界にとらえているのでそう時間はかからないわね。

「1日通しての修業だったしね。それに剣術・体術・魔法と体力の使うものばかりだったし」

「そういう割に義姉様、最後にはあのハリネズミ岩、雷の矢で消滅させましたけどね」

「・・・」

そう、修行の最後に派手にいこうと、私は詠唱有りの雷の矢を101本、エヴァが串刺しにした岩に叩きこんだのだ。

『魔法の射手・雷の矢』は氷の矢と違い、物理的に貫くと言っより、サキタ・マギカその熱で焼き貫くという攻撃だ。

それを叩きこむとあら不思議、氷の矢が串刺しにされていた岩が綺

麗に消滅してたとき。

・・・ちなみに岩の大きさは、片側1車線の道路が簡単に塞がる程度の大きさだったと言っておくわ。

・・・はいはい、チートチート。

「まあ、それは置いていて、明日はそれぞれの技術習得に集中しましょうか」

「そうですね。私も早く人形を自由に使えるようになりたいですし強引に話を変えると、エヴァも続く。

結局エヴァは、人形使いを目指すことになった。

明日エヴァは人形使い、私は魔法具作成の修行に明け暮れるだろう。

「それじゃあ今日も早く帰って休まないいですね」

「えー」

「えーじゃありません」

「本当にいいの?」

そこまで言った私は後ろからエヴァに抱きつき、囁く。

「っ！義姉様?」

「本当に、なにも無しでいいの？」

「それは／＼／＼／＼」

「エヴァも好きだものね、気・持・ち・い・い・こ・と」

「!!!!!!!!!!!!」

耳元で甘く、ねっとりとしづき頬を撫でてあげる。

そうすれば、夕日もびっくりするくらい顔を真っ赤に染めた、我等の最終決戦兵器の出来あがり。

うむつむ、この子さえ居れば、私は3年どころか1000年2000年、むしろ永遠に余裕で戦えるわね。

そんなふうにはしゃれつきながら、2人並んで歩いていく。

………翌朝、若干げっそりしながら艶艶の義妹と、にっこり艶艶の義姉が居たとかいないとか。

第9話 節目と新たな関係（前書き）

前回のあらすじ

剣術・体術・魔法の修行

私用で遅くなり申し訳ありません。

注意

R15描写があります。不快な方は戻るを推奨いたします。ご注意ください。

第9話 節目と新たな関係

皆さんごきげんよう、シルヴィアよ。

私たち義姉妹は今、ヨーロッパの某所を歩いているわ。

時は西暦1420年6月20日。

エヴァと出会って10年、関係を持って6年、墮落した生活から抜け出して5年。

ん？時間が飛んでいる？キングクリムゾン？ナニソレオイシイノ？

そんな訳で今日はエヴァの20歳の誕生日。

この日に合わせて私は目的があってここにやってきた。

「やっと着いたな」

隣を歩く愛しき義妹、エヴァの言葉に視線を前に向ける。

目の前に建つのは1つの城。

ヨーロッパで言う、町を城壁内に含んだ城郭都市としての城ではない。

むしろ皆に近い規模の、純軍事的な意味での城だ。

城の名はレーベンスシュルト城。

・・・エヴァの、かつての実家。

私は隣のエヴァに視線を向ける。

ここ数年で更に成長し、今や立派な大人の女になった。

容姿は原作で言う幻術状態のエヴァと一緒に。合わせて口調も原作の様な大人びたものになっている。

年齢が20歳になったのだから当たり前と言えば当たり前なのだが。

それでも昔のように頻繁には「義姉様」と呼ばれなくなり、義妹の成長を嬉しく思う反面、少々悲しいとも思う義姉。

まあ、そんな外見はともかく、この地はエヴァにとって悲しい過去を持っている。

10年経っているとはいえ、過去は決して消えさりはしない。

それでもここに来たいと思ったのは全て私の我儘。

私が提案した時、エヴァは特に反応を示さず受け入れた。

だからといって、いやむしろだからこそ、私は注意深く様子を見なければならぬ。

そんな風に観察していると、不意にエヴァが視線を向ける。

私の視線に気付いたのか苦笑を浮かべる。

「そんな顔をするな、シルヴィア。ある程度はもう吹っ切れているさ」

「それでも心配するのが義姉と言つものよ」

「ふふっ、そうか・・・それよりもなぜ急にここに？」

じゃれ合っていると不意にエヴァが理由を尋ねてくる。

私が提案した時も訪ねてきたが、その時と同じ返答を返す私。

「ん〜、まあその時になつたら話すわ」

「まあ、私は別に構わないが・・・それじゃあ入るか」

私の誤魔化しも特に気にせず、エヴァはとつと城の中に入っていく。

10年間、人の住むことがなかった城はやや寂れていた。

あの惨劇の後、この城は放棄されたようで人が住んだ形跡はなかった。

私は、その現場である広間に立っている。

大きな窓からは大分傾いた日が差し込み、部屋を紅く染め始めている。

さすがにあの後片付けたのか、広間は綺麗になっており、血の跡などの形跡は残っていない。

ちなみにエヴァはこの場に居ない。

あの後城門をくぐり、城の中を見て回った。

駐屯していた兵のための兵舎や、使用人のための宿舎。物資を納める倉庫や、馬のための厩舎。

朽ち始めたそれら建物の合間を歩きながら城壁に上った時、それは見つかった。

城に接するように広がる森の中に、綺麗に切り取られたように円形の空白地を見つけた。

それを見た瞬間、エヴァは走り出し、私もそれに続いた。

きつとそこには・・・

森の端から続いた獣道は、その空白地に続いていった。

そして到着したそこには、予想通り2つの墓が、静かに佇んでいた。

私はそつと墓の前に跪き、手を合わせる。

（はじめまして、エヴァンジェリンの義姉をやらせて頂いています、シルヴィアです。彼女は私が必ず守ります。どうか心安らかに、お眠りください）

短く祈りを捧げると、私は立ち上がり、エヴァを残して城に戻った。

物思いにふけっていると、広間の扉が開く。

入ってきたエヴァは、落ち着いて見えた。

「もう、いいの?」

「ああ・・・もう大丈夫だ」

その表情、声音のどこにも無理の色は感じられない。

悲しくないはずはない、ただその悲しみに溺れるほど弱くもない、か。

この10年で本当に強くなったのだ、そんな事を考える私。

「それで？そろそろここに来た理由を教えてくださいでもいいんじゃないか？」

そんなエヴァの言葉に、今度は緊張し始める私。

もちろん勝算はある。むしろかなり有ると言える。それでも緊張はするものなのよ。

こんな緊張、初めてエヴァと会って、一緒に旅することを誘った時以来かもしれない。

かといって何時までもだんまりを決め込む訳にもいかない。

意を決した私はエヴァの前に立つと、右のポケットから手のひらに収まる箱を取り出し、差し出す

「これをあなたに受け取って欲しいの」

静かにそう告げる私に、エヴァは首をかしげながら受け取り、箱を開く。

困惑が彩っていた表情は、箱を開いた瞬間驚愕に変わる。

箱に入っていたのは、銀に輝く、宝石もついでいないシンプルな指輪。

唯一の装飾は、内側に掘られた『S t o E』（シルヴィアから

エヴァンジェリンへ」の文字のみ。

それが示す意味はただ1つ。しかしそれは、普通の人が示す以上の意味を持つ。

これはただの婚約指輪や、結婚指輪を示すものではない。

私達は共に、人ならざる者。不老不死として、永遠の時を生きる者。

そんな私達が交わすこの指輪もまた同じ。

『エターナル・リング
永遠の契りを結ぶ指輪』

別に今までと劇的に関係が変わる訳ではない。

それでも改めての、そして永遠の契り。永遠の愛。ずっと共に在ることの誓い。

彼女もそれを理解している。瞳を揺らしながら、口を開く。

「いい……のか？」

この10年で成長した彼女。

背格好や雰囲気、口調も随分大人びた。

それでも、わずかに低い視線から、上目遣いで問いかける様は、幼い頃から変わらない。

そんな彼女に微笑みを浮かべる。

それに、そもそもそんな問いの答えなど、10年前の、初めて出会ったあの時から決まっている。

「あなただからよ。あなただからこそ、私は共に生き、歩んでいきたいの」

私の言葉に目を見開くエヴァ。

「愛し合う義理の姉妹として。そして恋人として、これから2人で一緒に」

私の言葉を噛みしめたエヴァは、やがておずおずと笑みを浮かべる。

右手に持った箱を私の方に向け、左手を差し出す。

私は箱から指輪を取り出すと、そっとエヴァの左手の薬指に嵌める。

そして嵌め終えた指輪にそっと口づけ。

手を離すと、エヴァはわずかに体を震わせながら、左手をギュッと抱きしめる。

数秒間、心に刻むように自分の手を抱きしめると、右手に持ったままの箱をポケットにしまい、指輪の嵌めた左手を私に差し出す。

私は何も言わず、左のポケットから同じような箱を取り出し、エヴァに渡す。

エヴァはそれを受け取り、真正面から私を見つめ、右手にそれを渡

す。

「これを・・・受け取って欲しい」

「ええ・・・喜んで」

開かれた箱には1つの指輪。

装飾は『E t o s』（エヴァンジェリンからシルヴィアへ）の文字だけ。

エヴァはその指輪を取り出すと、私の左手の薬指にそっと嵌める。

そうして指輪に口づけ。

永遠の契りを結んだ私達は、見つめ合う。

そうして、動いたのはどちらだったのか。

2人は抱きしめ合い、唇を重ねる。

頬を伝う二筋の涙を感じながら、愛を、想いを、喜びを交わし合う。

夕日の差し込む広間、2つの影は1つに重なり合い、離れることは無かった。

あれから少し経った。

夕日の加減からそれほど時間は経っていない、それでも私達にとっては、永遠とも刹那とも言える大切な時間。

それを終えた私達は、エヴァの願いによって再びここに立っている。

2つの墓、エヴァの義理の両親が眠る場所。

(エヴァンジェリンの義姉兼恋人をやらせて頂いています、シルヴィア・マクダウェルです。彼女は私が必ず守り、そして彼女に守られ、共に生きていきます。2人で必ず幸せになってみせます。どうか心安らかに、お眠りください)

先ほどと同じような、それでいて未来も含めた祈りを捧げる。

祈り伏せていた視線を上げると、同時にエヴァが一步前に出た。

「父様、母様、紹介しよう。私の自慢の義姉兼恋人のシルヴィアだ。これから2人で共に、幸せに歩んで行く。だから安心して、眠っていてくれ」

そう言うところりところちらを向くエヴァ。

あっ、と思った時にはすでに遅かった。

首に手を回し、唇を重ねるエヴァ。

両親の前で口づけ、という状況に内心苦笑しながら、それでも見せつけるのもいいかと抱きしめ返しキスを続ける。

その時、サアアツと木々がざわめき、夕方にしては暖かな風が2人を包んだ。

まるで私達を祝福しているかのように。

ちらりと視線を向けると、エヴァも微笑んでいた。

そうして2人は、少しの間幸せに浸っていた。

ぱちり・・・とまどろみから眼が覚める。

まず視線を向けたのは窓の外。

まだ暗く、どうやら寝過ぎしたと言っ事はなさそうで一安心。

と言っても、遠くの方がうっすらと明るくなり始めている。

あまり時間に余裕が有ると思えない。

あの後私達は、エヴァの誕生日と言う事で豪華な料理を作り、夕食

を共にした。

そして魔法で用意したお風呂に入り、かつてエヴァが過ごしていた寝室へ。

・・・今日は私達にとって、結婚初夜に等しい記念日だ。

当然のごとく、ベッドの上ですることは1つ。

どちらからともなく抱きしめ合い、キス。

いつものように、否いつも以上に激しく、女同士の快樂を貪った。

・・・しかし今日はそれだけに留まらなかった。

魔法には、一時的に肉体の一部を変化させるものが存在する。

それを知った時、私は思いついてしまった。

女性の身体で最も敏感とされる、あの部分を大きくしたらどうなるかと。

まあ、ざっくばらんに言ってしまうえば、核を巨大化させて、ふなりにしてしまおうってことよ。

女の子が大好きな女として、妄想の産物とは言え想像した事が無い訳が無い。

そんな訳で修業の合間に練習し、今日に間に合わせたと言うわけ。

まあ、その時点で、エヴァに行きつづぬん以前に、恋人としての関係を断られることはないと思っっている辺り私も大概ね。

そうして行ってみた感想はというと・・・すごい一言だった。

事前に何度も達して朦朧としていたエヴァに突き刺した瞬間、頭の中が焼き切れ、ネジが数本飛んだ気がしたわ。

別に、犯す（無理矢理・ダメ・絶対）のが初めてというわけではないわ。

前世で言えば、その手の玩具の入手に困る事はなかったもの。付き合っていた子たちとそういったプレイもしていたわ。

でもこれは違う。

生身の、自分の身体で犯すことに、これほど快感を得られるとは思っていなかった。

まあ、性感帯の塊を巨大化させているのだから、当然と言えば当然なのだけ。

けどここで誤算が1つ。

通常男性は達すると、放出と共に萎えたり冷静になるらしいわね。

でも女性の場合、体調や資質その他諸条件はあるけれど、いくら絶頂に達したとしても、体力がある限り続けることも可能なのよ。

そこで私を考えてみる。

性別：女。色欲：いっぱい。体力：チートで無尽蔵。放出：愛液
両性具有の私〃絶倫

・・・・・・・・・・・・・・・・気づいた時には、やり過ぎていた。

目の前には、汗と涎と、愛液に塗れ、体を痙攣させるエヴァ。

その足元には、処女を散らした証である鮮血が、シーツを染める。

普通の人間なら、ここで相手を労り、やめるなりするだろう。

しかし残念ながら、今ここに居るのは魔王候補の色欲狂いの元女帝
なのだ。

今のエヴァの様子は、私の嗜虐欲を刺激する。

もっと愛したい。壊れるほどに抱きしめて、愛して、貪りたい。

そう本能が叫ぶ中、それでもなけなしの理性をかき集めて落ち着こ
うと思っている最中、彼女は口を開いた。

「いい・・・ぞ・・・義姉様の・・・好きに・・・して」

私はゆっくりと視線を彼女に向ける

「まえ・・・にも、言ったろ?・・・義姉様・・・の・・・好きに・・・
して・・・いいと・・・」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

「義姉様……の……好きに……使って……もら……うのが……私の……しあわせ……だから」

欲情に蕩けきった深紅の瞳は興奮で瞳孔が開ききっている。

嬌声を上げ続けた口は開かれ、かすかに涎を垂らしている。

そんな様子のエヴァの言葉で、私の頭の中で何かがぶつんと切れる音を聞いた。

エヴァに魔法を掛け、彼女も両性具有にする。

そのまま跨り、私の秘裂にあてがうと、耳元に唇を寄せる。

「私の処女を、あなたに捧げるわ」

甘く囁けば、どこかでプシャツと大きな水音がするが気にしない。

私は微笑みながら、一気に腰を下ろした。

………うん、今日も絶好調の暴走振りね。

互いに処女を散らした後、獣のように交わり合い、一息ついたところでまどろんでいた。

一息と言っても、お風呂から上がったのが体内時計で10時ごろ。外の様子からまだ朝の4時頃で、まどろんでいたのは1時間も経っていない。ということは・・・5時間ほどかしらね。

ちなみに2人とも両性具有は解除済み。

まあ、暴走具合については、2人の身体はべたべたということ、部屋に充満する汗と愛液が入り混じった濃密な雌の匂いで分かるのだけ。

そしてかすかに混じる血の匂い。

私としては2度目の喪失。まあ、興奮に狂っていたおかげで痛みこの字も無く快感しかなかった訳で。

エヴァは大丈夫だったろうか。暴走していたとはいえ事前に解したりはしたつもりだけど・・・。

それにしても・・・やりすぎた。

別にどうしようも出来ないし、まして後悔するはずなどないのだけど、それでも反射的に思ってしまう。

かといって、私の性癖から考え、また同じ状況になるのは目に見えている訳で・・・それじゃあその性癖を直す意志があるかと言えば無い訳で・・・だから思い浮かぶ言葉は・・・どうしよう。

「どうしようもないさ。シルヴィアだからな」

そんな思考の無限ループに陥り掛けていると、目の前で抱きしめて

いたエヴァが口を開く。

その声は若干掠れている……まあ、あれだけの嬌声を聞かせてくれたのだからそれも当然と言えるのだけど。

「何度も言っているだろ？シルヴィアのやりたいようにしてくれればいいんだ。それが私の幸せなんだからな」

「……」

「私はすっかりシルヴィアに染められたんだろつ。愛され責められ犯され黷られ壊されて感じるマゾヒストに」

「……」

「そしてシルヴィアは、愛し責め犯し黷り壊すことで感じるサディスト。それだけのことだろつ？」

「……」

「お互い愛し合っていて、互いに染まって相性がいい。それだけの事じゃないか。何を悩む必要がある？」

そこまで淡々と、当たり前の事実を述べているだけのようだったエヴァの表情ががらりと変わる。

大人の好い女に成長したことで得た色気、妖艶な笑みと、子供の頃からの無邪気な笑みが合わさった、一言で言えば凄絶な笑み。

その笑みを見ただけで、背筋にぞくりと快感が走る。

「今更捨てられないでしょう？私も離れる気はないよ。私達は愛し合っている。私は義姉様に滅茶苦茶にされたいと思っている。義姉様は私を滅茶苦茶にしたいと思っている。だから義姉様の好きにしているの。ね？義姉様」

「ふふふ、そうね。今更キティと離れるなんて考えられないわ。有りえないわよ」

「なつ、まあ、うん／＼／」

私のストレートな言葉に照れたのか、それとも久しぶりに呼ばれたミドルネームに照れたのか。

ちなみに2人きりの時だけと厳命されたので、当面はベッドの中だけとなった。

さらに言うと、今まで忘れていたのもあるが、契りを結んだ証として預かる事になった。

エヴァの言葉と表情に微笑みながら抱きしめる。

ふと昔、前世でもこんなふうに、愛し合っていた子たちに苦笑されながら説教を受けた事もあった気がする。

何だか情けないかも？と思いつつ、こんな関係もいいのかと樂觀思考。

そんな事が脳裏をよぎりながら、再び快樂を貪る事に集中した。

あれから互いに数度、絶頂を極めると、本格的に日が昇り始めた。

さすがにこれ以上はまずいと切り上げ、お風呂に入りさっぱりする。

そうして着替えると城の外へ。

そこで昨日準備していた魔法陣を起動する。

陣は城全体を覆うように描かれ、陣の外で跪く私の前には1つの水晶玉。

10年の魔法具修行の成果が今試されるわ。

そう意気込みながら一気に魔力を高めると、辺り一面が光に包まれる。

そうして光が収まる頃には・・・目の前から城が消えていた。

そうして水晶玉の中を確認すると・・・ちゃんと城が入っていた。

「これがダイオラマ魔法球か？」

「ええ、そうよ。もっともこれは、1時間を3時間にしかできない未完成品だけだね」

「魔法具と言えば・・・これもそうだったんだな」

そうしてエヴァが差しだしたのは、左手にはまった指輪だ。

「ええ。チート能力満載の純ミスリル製よ。2人の永遠の愛を示すには最適でしょ？」

「ま、まあな。あの偶然精製方法を知ってしまったやつか」

うむむむ。どもりながら赤くなるエヴァは可愛いなあ。

2人の薬指に収まる指輪、見た目は只の銀の指輪だが、実際はミスリル製の指輪なのよ。

ちなみにミスリルとはこの世界で最高の硬度・魔力伝達・集束・拡散効率を誇る、金属の中の王とも言うべき存在。当然とても希少な物で、なおかつ旧世界には存在しないはずのもの。

それをどうして私が持っているかと言えば、魔法具作成の修行中に偶然精製方法知ってしまったから。

まあ、良く見て探したら魔導書に載っていたのでびっくりした。主に魔導書のチート具合に。

この時代はただの屑石扱いのダイヤモンドの原石と、襲ってきた賊の死体から徴収した金の指輪（真鍮じゃなくて本物の金だった）が、魔法具作成の中でも基本技術である合成の練習中に混入し、出来てしまったのだ。

意図せず最高の素材を手に入れた私は、これを永遠の契りを結ぶ指輪エターナル・リンにしようと考えた。

加えて、神様特製付与魔法の再現こそまだ出来ないが、コピーは出来るようになっていたので、それも付与することに。

「それで、結果この指輪には、オートプロテス自動物理防御魔法・オートシエ自動魔法防御魔法・オートリジェネ自動体力回復魔法・オートフレッシュ自動魔力回復魔法・オートヘイスト自動加速魔法・オートクリーン自動修復魔法・オートリペア自動環境快適魔法・オートファイブ自動収納魔法と服装一式の付与魔法がコピーされた上に、魔力伝達効率強化・魔力集束効率強化・魔力拡散効率強化・耐久力強化・誤認強化と能力目白押しオートホールドの夢の逸品ができたと言うわけ。」

「まあ、今更やりすぎ云々言つつもりはないけどな。それより誤認強化とはなんだ？」

「装着者の意志で魔力を流せば、指輪を第三者から見えないようにすることも可能なの。それと装着者や指輪本体の魔力も隠蔽する事ができるわよ」

「魔力はともかく、なぜわざわざ指輪を隠すんだ？」

「虎穴に入らずんば虎児を得ず。でもこれって虎穴にフル武装で入っちゃダメとは言っていないのよね」

「・・・ああ、なるほど」

さすがエヴァは阿吽の呼吸で分かったようだ。

「武器を取り上げて安心？と思った途端に叩きのめされるってオチをやってみたいのよね」

「くくくつ、えげつないな。まあ、私達に楯つく相手に容赦は無用

だからな」

まあ、これら能力が無くとも大抵の相手なら身体能力だけで倒す事が出来るとは思っけど。念には念を入れてね。

どうせ倒すなら、息も絶え絶えになって倒すより、さんざんからかって弄んだあと一息に足でプチっと潰す感じが好きだもの。

あ、忘れるところだった。

「エヴァ、これも渡しておくわ」

そうしてマントから取り出したのは二振りのサーベル状の長剣。

「これは！」

抜いてみたエヴァの眼が見開かれる。

細身で反りのある刀身自体は銀に輝き、込められた魔力により黒に輝く。先端10cmほどでは背の部分から刃に向かって更に尖っていき、刺突も出来るようになってる。

持ち手を守る覆い、護拳も広めにとった。

刀身から鍔、柄や護拳、鞘に至るまで全てミスリル製よ。

「銘は？」

「魔剣・クライスト。同時に作った姉妹剣よ」

元ネタはB L C K C Tのセフリア・アースよ。彼女の剣そのまんま。でも刀身の根元は柄から真っ直ぐ。そこだけ違う。主に強度の問題だね。

特殊部隊をまとめる若きカリスマ。綺麗で有能なお姉さんは好きですか？もちろん大好きよ。

ちなみに付与されているのは、オートリジエネ自動体力回復魔法・切れ味強化・耐久力強化・魔力強化よ。

私のクライストには、ステータスリミッター能力制限魔法も付与されている。

魔力強化は文字通り、純粋な魔力を付与することで切れ味・耐久力をさらに上げるものよ。

「ん？シルヴィアには正宗があるんじゃないか？」

「あんまり短刀から変化させたりしても眼につくから。余り使わなくて済むようによ。それに私・・・魔王が数回進化したりするの好きなのよね〜」

「？・・・ああ、ようやく倒したのに・・・ってことか？」

「正解」

ステータスリミッター能力制限魔法の効果、それは私の全力に対して力の何割かが制限される。

このクライストの場合、どんなに頑張っても全力の6割しか出せないようにしている。

何故そんな事をするかって？常に余力を保つためと……相
手をおちよくるためよ

正宗で8割、妖刀正宗で全力で戦えるわ。

短刀は戦うためのものではないから除外、ヘルメスの杖は念のため
制限なしにした。

「さて、お城が消えたと街の人にばれる前にとつと移動しましよ
うか」

ダイオラマ魔法球をリュックに仕舞うと、それごとマントに収納。

いつもの格好に、新たに左腰にクライストを差せば準備は完了。

「さて、次はどこに向かう？」

「ん〜、正直どこでもいいかな〜」

「何だ、適当だな」

「ふふっ、だって」

そこで言葉を区切ると、右手でエヴァの左手を掴む。

指先が愛おしげに指輪を撫でる。

「エヴァと一緒になら、どこに行っても楽しいもの。でしょ？」

「そ、そうだな／＼／」

言いながら赤くなるエヴァを可愛いなあと抱き締めつつ、2人はのんびり歩きはじめる。

ずっとずっと2人で、歩き続ける。

エヴァンジェリン設定（前書き）

原作から容姿など変更点があるエヴァンジェリンの設定をまとめてみました。

本作の累計ユニークが10,000、PVが50,000を突破しました！

これも皆様のおかげです。ありがとうございます！

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

エヴァンジェリン設定

名前

エヴァンジェリン・マクダウエル（第4話）

エヴァンジェリン・キティ・マクダウエル（第9話）シルヴィアと永遠の愛を誓った証にミドルネームを預けた。2人きりの時だけ呼ぶよう厳命したため、普段はベッドの中でのみ呼ばれる。

年齢

20歳（肉体年齢≠不老不死により永続）

容姿

原作の幻術状態と同じ。身長165cmほど。スリーサイズはボンキュッボンのグラマラス美人さん。Fcupのポイン級。幼い頃憧れた義姉のサイズを超えた。その理由は成長期の5年ほど、当の義姉に愛でられたからとか。瞳の色は深紅。西洋人形のような完成された造形に、高い腰からすらりと伸びた脚、肌も白くきめ細やかなすべすべシルクの完璧美女仕様と、チート容姿の義姉に並ぶ美人。

能力・スキル

ハイ・デライトウォーカー
吸血鬼の真祖：吸血鬼の上位種にして不老不死の存在。一般的な吸血鬼の弱点とされる日光や流水を克服しており、吸血した相手を眷属にするか任意で選べる。不老不死からくる圧倒的再生能力、闇の眷属故の膨大な魔力から、『旧世界』『魔法世界』問わず最強種の1つとされている。

剣術：シルヴィアと同じ日本刀剣術を学ぶ。『斬る』ことに主軸を置き、今後は剣筋の『早さ』や攻撃を『受け流す』事を伸ばす予定。

体術：柔術を徹底的に学ぶ。相手の力を利用する戦い方は、何かの事情で自分の力が封じられた際有効なため。現在そこそこのレベル。

魔法：適性属性は氷と闇。現在まで魔力制御を中心に修行。基本魔法の多くと、魔法の射手^{サキタ・マキカ}を習得。

人形使い：それぞれ別の技術を1つ学ぶと言う事で選んだ。現在修行中。

服装・装備

エターナル・リンケ
永遠の契りを結ぶ指輪（第9話）

シルヴィアと2人、永遠の契りを結んだ指輪。エヴァの指輪の内側には『S t o E』（シルヴィアからエヴァンジェリンへ）の文字が刻まれている。シルヴィアが作成。

オートプロテス
自動物理防御魔法・自動魔法防御魔法・自動体力回復魔法・自動トリフレッシュ
オートヘイスト
魔力回復魔法・自動加速魔法・自動清潔魔法・自動修復魔法・自動オートフライン
オートホルド
環境快適魔法・自動収納魔法付与・魔力伝達効率強化・魔力集束効率強化・魔力拡散効率強化・耐久力強化・誤認強化（装着者の意志で魔力を流すと指輪が第三者から見えないようにする・装着者及び指輪本体の魔力を隠蔽することが可能）

魔剣・クライスト（第9話）

サーベル状の長剣。二振りの姉妹剣。シルヴィアも同じものを持つ。細身で反りのある刀身自体は銀に輝き、込められた魔力により黒く輝く。先端10cmほどでは背の部分から刃に向かって更に尖っていき、刺突も可能。護拳も広め。

刀身から鍔、柄や護拳、鞘に至るまで全てミスリル製

オートリジエネ
自動体力回復魔法付与・切れ味強化・耐久力強化・魔力強化（純粹に魔力を込め切れ味・耐久力を更に強化）

ステータスリミッター
能力制限魔法付与（シルヴィアのクライストのみ。全力に対して力の何割かが制限される。クライストでは全力の6割が限界）

元ネタはB L C K C Tのセフリア・アース

ロングブーツ

膝下ぐらいの長さの黒ブーツ。ヒールはないぺたんとしたタイプ。

初めて出会った頃にシルヴィアから貰う。

オートリジエネ

オートヘイスト

オートクリーン

オートリヘア

自動体力回復魔法・自動加速魔法・自動清潔魔法・自動修復魔法が

付与。

ブラウス・ホットパンツ

どちらも黒。ホットパンツはぎりぎりお尻が出ない短さ。初めて出

会った頃にシルヴィアから貰う。

オートクリーン

オートリヘア

自動清潔魔法・自動修復魔法が付与

ローブ

黒地に赤と金で飾りつけ。袖あり・前開き・フード付き・腰丈の、

パーカーの様なローブ。初めて出会った頃にシルヴィアから貰う。

オートプロテス

オートシエル

オートリジエネ

オート

自動物理防御魔法・自動魔法防御魔法・自動体力回復魔法・自動魔

リフレッシュ

オートクリーン

オートリヘア

オートファイン

力回復魔法・自動清潔魔法・自動修復魔法・自動環境快適魔法が付

与。

マント

膝下丈のフード付き袖なし、胸元でボタンで止める完全外套使用。

色は黒。初めて出会った頃にシルヴィアから貰う。

オートプロテス

オートシエル

オートリジエネ

オート

自動物理防御魔法・自動魔法防御魔法・自動体力回復魔法・自動魔

リフレッシュ

オートクリーン

オートリヘア

オートファイン

力回復魔法・自動清潔魔法・自動修復魔法・自動環境快適魔法・自

動収納魔法が付与

オートホルド

その他服装

旅の合間に積極的に狩りをして、余った食料を寄った町で売却。売り上げで洋服を購入している様子。基本的にワンピースタイプを好む。幼い頃はフリルや飾りがたくさんついたゴスロリ系が好みだったが、成長してからはスリットや露出が多めのセクシー路線も好み。着る本人が極上な美人のため、可愛い路線から綺麗路線まで何でも着こなす。たまに義姉を着せ替え人形にして遊ぶ。

性格・性癖

義姉の影響を強く受け、原作の様な誇り高い人物となる。

ただし、自分達に仇成す輩には容赦しない+積極的攻勢に出る苛烈な部分も加味される。

義姉と同じく『私は、私と私の大切な者のために生きる。そのため
に力を行使する』という覚悟と『シルヴィアの幸せが、自分の幸せ』
という想いを持つ。

その他内面的にかなり義姉であるシルヴィアに近いものとなっている。

性癖面では、シルヴィアに染められ（調教され）真逆のマゾヒストの道突き進む。

『シルヴィアの幸せが、自分の幸せ』と合わせり、身も心も捧げる快感を知る。

シルヴィアと真逆の、壊れるほど愛されたい、という被虐的・狂氣的な一面も持つ。

???（後に解放）

シルヴィアが自分1人で収まる器量ではなく、他の相手（女性だと疑わない）が出てくると確信している。その時は、嫉妬しながらも案外思考の迷路に迷いやすい義姉の背を押すと決めている。当然自分も同じだけ愛してもらおう前提で。

普段は対等な恋人として『シルヴィア』と名前で呼ぶようにしているが、からかう時や甘える時、とっさの反射で呼ぶ時などは『義姉様』と呼ぶ場合もある。

第10話 魔女狩りを狩る者（前書き）

前回のあらすじ

エヴァの20歳の誕生日

晴れて義姉妹兼恋人に

注意

今回からある宗教を敵対勢力にするため、独自設定・解釈・捏造が入ります。

あくまでも『この物語における』位置づけですので、事実と違う場合もあります。

ご注意ください。

第10話 魔女狩りを狩る者

「・・・俺が知ってるのはそれぐらいだ」

「そう・・・ありがとう」

私は応対してくれたマスターにそう告げると、白ワインのボトル1本とワイングラスを2つ受け取り、わざとワイン2本分の代金を置いて、恋人の待つテーブルに向かう。

皆さんごきげんよう、シルヴィアよ。

エヴァの故郷から出発した私達は今、ヨーロッパ東部にある村の酒場に居るの。

時刻は日も沈んでしばらく経つ夜。

宿屋で夕食を終えた後、目的があった私はエヴァを誘い村に一軒だけあるこの酒場に来た。

普段男しか居ない酒場に現れた美女2人に、様々な視線が向けられる。

そんなのはどこ吹く風とさっさと席を取り、私がお酒を買いにカウンターへ行っただというわけ。

目的の情報を得られた私は、エヴァの向かいのイスにマントを掛けて座るとボトルを空ける。

「ずいぶん話し込んでいたな？」

目の前の美女、エヴァがそう問いかけながらグラスを向ける。

「ええ・・・少し知識の確認をね」

エヴァのグラスに注ぐと、今度は自分のグラスを取る。

今度はエヴァが注いでくれて、無言でカチンとグラスを合わすと一
口。

うん、なかなかおいしい。

元々お酒には詳しくなかったけれど、旅をしていれば飲む機会くらいはある。

エヴァも幼い頃から飲んでいたし。ヨーロッパらしい面だ。

渋みの強い赤ワインよりは、2人とも白ワインが好き。

味音痴な私基準でおいしいのに当たると得した気分になる。

もちろん、熟成年数その他の難しい事は分からない。

寝かせたら寝かせた分だけおいしくなる？らしいとしか知らない。

「それで？」

一息に飲み干し自分で新たに注ぎながら、知識と言う単語に気を引き締めエヴァが訪ねてくる。

彼女には私の前世の事も話してあるから当然と言えば当然の反応。

私が口を開こうとしたその時・・・そいつらは来た。

「へへへ、姉ちゃんたち。どうせなら俺たちと飲もうや」

そう言いながら私達のテーブルに近寄って来たのは、酔った2人組の男。

一応気と魔力を使い探るもただの一般人。完全な『あちら側』・旧世界の住人だ。

魔に生きる私達に話しかけるとは、運が無いなあと内心呆れる。

まあ酔って気が大きくなっていてるところに、どう客観的に見ても極上の旅人美女2人が居れば、わからなくはないけど。

「ふふつ、ごめんなさい。これから女同士の大事な内緒話があるの。またの機会にしてもらえるかしら？」

特別サービスで笑みを浮かべながらやんわり断る。

ちなみにエヴァは我関せずと、ちびちびワインを飲んでいる。

・・・そりゃ男2人も私の方向いているからいいけどさ。

ふと探ると、酒場中の人間がこっちの様子を伺っている。

この酒場に入ってから感じていた、ただ美人を見る目や、男の欲望

丸出しの視線など様々な視線が集まっている。

「いいじゃねえかよ、ちょっとくらい」

しつこい男Aが私に手を伸ばしてくる。

いい加減辟易していた私はその手を払い除け、冷めた声で告げる。

「しつこい男はモテないわよ？出直してきなさい」

「テメエ！下手にでてりゃいい気になりやがって！」

どこが下手だったのか疑問が満載の男は、顔を真っ赤にしながらわめき散らす。

・・・むさ苦しい酔った男の罵声を大音量で聞くて・・・なんて罰ゲーム？どうせ聞くななら女の子の嬌声の方が・・・

そんな現実逃避をしていると・・・

「そんならこっちの無口な女にしようぜ」

黙っていたもう1人の男Bが、エヴァに手を伸ばした。

うん、無理。穩便とかもう無理。私の低い沸点が臨界点超えたもの。

ずっと立ち上がるとエヴァに延ばされた手を掴み、引っ張りこちらを向かせる。

「ん？・グヘッ」

何事かと呆けていた下衆Bの顔面に、フルスイングの右ストレート。左手は下衆Bがエヴァに伸ばした右手を掴んでいるので、Bは吹き飛びもせず反動でこちらに向かう。

今度はその腹部に右のひざ蹴りを叩きこむ。

「グエエ！」

衝撃で宙に浮きかけたBの腕を再度引っ張り、背中を向かせるとそのまま蹴りつける。

ドッカーン！

壁側の席を取ったのが幸いし、下衆Bはそのまま壁とキス……。の予定が突き抜けたけどまあ結果オーライ。

「テッ、テメエ！このクソアマ！」

ようやく頭が再起動したのか下衆Aがわめく。

でも正直まともに相手をするつもりが無い私は、ホットパンツからスラリと伸びた脚を、ぶんと振り上げる。

ブーツのつま先は狙いを外さず、男の脚の間の付け根へ。

「ガッ！（ピクピクピク）」

なにがぐにやりとした感触がしたけど気にしない。酒場の空気が凍

った気がしたけど気にしない。

まあ、男にしたら痛いらしい。女の私にはわからないけど。

膝をつき痙攣を始めた下衆Aを尻目に、私はその場でジャンプ。

くるりと空中で一回転をしながら、遠心力を乗せた右足踵をAの後頭部へ。

ドッカーン！バキツメキツ！

床にキス・・・というより頭をめり込ませた下衆の出来あがり。

「ふうっ、こんなものかしら（パンパン）」

なんとなく手を叩きながら、一息。視線を酒場に流すと、皆自然にそらした。

私は下衆2人のポケットを探ると財布を取り出し、カウンターへ向かいそれを差し出す。

「これは？」

初老の酒場のマスターが訝しげに尋ねてくる。

「床と壁の修理代よ。あとは迷惑料。お客さんも驚かせちゃったから1杯おごりよ。足りなきゃこれで」

私はそう言いながら、財布から硬貨を何枚か出す。

「いや、こつちだけで十分だ」

マスターは苦笑しつつ私のお金を戻させると、奢りの1杯の準備を始めた。

席に戻るとグラスを手に取り、酒場に視線を向けて笑みを浮かべながら掲げる。

そこかしこからグラスが掲げられると、再び喧騒が戻り出す。

もつとも、此方に向かうぶしつけな視線は一切消えたが。

それでも念には念を入れ、認識障害と防音の障壁を張る。

「それで？知識の確認とは？」

まるで何も無かったかのように会話を再開するエヴァ。

「少しは手伝ってくれても良かったんじゃない？」

「私に手を出されそうになって、シルヴィアが何もしないわけがないだろ？なら私は安心して酒を飲んでいれば十分さ」

さらりと当然の真理の如く話すエヴァ。

まあ、事実そうなのだけど。それでもなんとなく悔しいので、体を寄せて耳元で囁く。

「それはもちろんそうよ。エヴァの全ては私のものだもの」

「！まつ、まあな／＼／＼」

一瞬で耳まで顔を真っ赤にしたのは決してお酒のせいではないはず。そんな照れたエヴァの様子をしばらく楽しむと、気を引き締め本題に入る。

「ローマ・カトリック教会が、魔女狩りを再び行い始めたそうよ」

魔女狩り。

魔女と疑われた女性（男性もごく少数いたとか）を拷問にかけ、魔女だと自白させ、火炙りの刑に処すと言う残虐行為。

カトリック教会主導、住民の集団ヒステリーなど諸説あるそれは、教会関係者の欲望を満たすためだったと言う説もある。

最初は12世紀ごろに行われ、一旦姿を消すも現在の15世紀ごろから再び行われ始め、16・17世紀が最盛期だったと聞く。

前世の事実がどうかはわからないが、この世界においてはほぼその

通りらしい。

教会に睨まれた女性は連行され、暴力的・性的拷問を受けて自白を強要される。

自白したら最後、待っているのは火炙りで処刑。

女の財産はすべて没収。家族や恋人など抵抗した者も処刑し、同じく財産を没収する。

教会は更に、その事実と力を前面に押し出すことで、影響下にある町や村からの搾取も始めているというテンプレな内容。

色欲に金銭欲、支配欲を満たす行為。

トップの教皇か、その周りを固める枢機卿か。地方を束ねる司教か、各町や村にある教会を治める司祭か。

どのレベルまでが関与しているのかは知らないけど……。

神の名を盾に好き勝手暴れまわる……文字通りの下衆共。

私の知識と、先ほどマスターから得た情報を伝えると、エヴァの目にも怒りの炎が灯っている。

彼女の場合、さらに思うところがあるだろう。

初めて出会ったときに居たロープの下衆と、追従した下衆共。

あのロープ男がこちら側の関係者だろうと、あちら側のただの司祭

だろうと本質とは関係ない。

一方的な決め付け、自らを正義と語り、暴力で蹂躪する。

「なぜ、今それを探った？」

問いかけてきたエヴァに、私は正面から答える。

「私はこの状況を利用できると考えているわ」

「利用？」

「教会に喧嘩を売る事で、その財産のいくらかを今度は私達が徴収する」

「なに！」

私の回答に驚いたエヴァが声を荒げる。

注目を浴びそうになるので、視線で抑える。

気づいたエヴァはすぐに口をつぐみ、ワインを一口飲み心を落ち着ける。

「なぜそんなことを？」

落ち着いたエヴァが静かに尋ねる。

ローマ・カトリック教会とえば、世界で最も多い信者を誇るキリスト教の中でも最大の派閥。

現在他の流派が生まれているかどうかは知らないが、ヨーロッパでも最大の勢力を誇る組織であるのは間違いない。

だからこそ、わざわざこちらから喧嘩を売る必要性をエヴァは疑問に感じている。

「私達は遅かれ早かれ教会に目を付けられるわ」

「教会に？」

「私達はこの10年で既に、賊や魔法使い共を手にかけている。恐らくそう遠くないうちに、魔法世界では私達に懸賞金が掛けられるわ」

「！それが教会側に流される・・・と言う事か」

「人ならざる存在に加え強大な力、魔法世界の下衆共は手段を選ばないでしょう。教会側への理由も、本当に魔女だからとも言えは済む話。仮に渋ったとしても金を渡せば通る程度には腐っているでしょう。私達は2つの世界から追われることになる」

「・・・」

「正直それどころにかなるつもりなんて私には更々ないし、ましてエヴァには指一本どころか爪の先すら触れさせない」

真正面から真面目に告げれば、再び顔を染めてくれる愛しい恋人。

我慢の出来なくなった私は、テーブルの上のエヴァの手を握り、感

触を楽しみながら話を続ける。

「狙われたところで叩き潰せばいい。ただ問題は、襲ってくる連中を叩き潰しても問題は解決しない。次が来るだけだもの。そんなのうざったくてしょうがないわ」

「・・・まさか」

「そう。必要ならばその組織ごと叩き潰せるだけの、あるいはこちらを恐れ手出しができないだけの力を持つてばいい」

にっこり微笑みながら告げれば、エヴァは苦笑を浮かべる。

「話を最初に戻すわ。どうせ後で敵対するなら、こちらから喧嘩を売って教会が溜めこんでいる財産を奪う。その財産を元手に私の未知知識と一緒に運用して、さらに巨大な財力を得る。」

「・・・」

「財力があれば、地位や権力を手に入れるのは容易いわ。そして何より、経済を支配できる」

「経済？」

「ええ。国にとって経済活動は命とも言える。それを支配する人間に刃向かう事なんかできないわ。商売が成り立たなきゃ、税も徴収できない。そんな事じゃ国が倒れるでしょ？」

くすくす笑う私を尻目に、ぽかんとするエヴァ。

うん・・・呆けた顔も可愛い。

「もちろん今までのように、旅をしながら撃退でも構わない。うざったいだけで手間はそんなにかからないから。だから今エヴァに問いたいののは1つ・・・理不尽な暴力を、理不尽な力で駆逐する気はある？」

「・・・」

「これは明確に、自分の意志で殺しに行くと言う事。目的は3つ。

財力を得るための足がかり・囚われた女性の解放・下衆共への鉄槌

」

「・・・」

「分かっているとは思っけど、女性の解放ははっきり言えばついでよ。同じ女として怒りを覚えるけれど、あくまで赤の他人。その程度よ。下衆共への鉄槌も私怨とかのようなもの。腹が立つから叩き潰す、それだけよ」

そこまで話すと私は言葉を切り、じつとエヴァを見つめる。

文字通り、原作とのターニングポイントと言えるわ。

原作のエヴァは、襲ってくる奴らは殺した。つまり正当防衛の範囲で降りかかる火の粉を払っていた。

なのに賞金首として追われ、悪のレッテルを張られた。

それでもなお、女子供には手を出さず、弱者もいたぶらない、誇り

高き悪の魔法使いとして君臨していた。

エヴァが誇り高いのは変わらない。攻勢に出るか否かの違いだ。

まあ、どんな決断にしろ、共に在るのは変わらないのだけど。

そう考えながら見つめていると、エヴァは顔を上げ、正面から私を見つめながら口を開く。

「・・・やろっ」

その視線は揺るぎなく、真っ直ぐに私を射ぬく。

「私達にも大きな利点がある。全ての女を救うなどとふざけた事を言つつもりはないが、ついでに助けるくらいはいいだろう。それに・・・」

そこで言葉を切ったエヴァは、おもむろに笑みを浮かべる。

「多くの下衆共に、私達に敵対する事をの愚かしさを早めに教えてやるのもいいだろう」

くすくすと、無邪気に、妖艶に、凄絶に微笑むエヴァ。

見惚れていた私は、気づけばエヴァを抱き寄せ口づけていた。

一瞬回りの事を考え体を強張らせたエヴァだが、魔法で外には普通に話しているように映っている事を思い出すと、身を任せる。

ぴちゃぴちゃと音を響かせ、舌を絡ませ、唾液をすすする。

ワインとエヴァの味が混ざったそれを楽しむと、今度は私が流し込みエヴァが啜る。

ひとしきり楽しみ落ち着けば、互いにグラスを満たし掲げる。

「私達は自身と自身の大切な者のために生きる」

「そのために力を行使する」

2人で誓いの言葉を囁けば、グラスを合わせ飲み干す。

「これで真正銘、悪の魔法使いの仲間入りだな」

グラスにワインを注ぎながら、可笑しそうに膝の上のエヴァが囁く。

「なら2人で悪を極めましょう？私達なら出来ないことはないわ」

囁き返し耳を甘咬み。2人で笑い、じゃれつき、キスを交わしながら、ワインを楽しむ。

・・・悪の魔法使い結構。

私達が好きに生きる事を悪と言うなら、私は喜んで自ら悪を突き進む。

全ては私とエヴァの幸せのため。

邪魔する者は叩き潰す。

腕の中のエヴァを抱きしめ、心に刻みながら、杯を交わしていった。

第11話 殺戮（前書き）

前回のあらすじ

酒場で情報収集

酔っぱらいを撃退

魔女狩り

教会と敵対者へ喧嘩を売ることに

注意

引き続き、一宗教を敵対勢力として表現しています。
事実の独自解釈・設定・捏造にご注意ください

第11話 殺戮

「あれか？」

「ええ、そのようね」

皆さんごきげんよう、シルヴィアよ。

私達は昨夜酒場で決めた事を実行するため、昼過ぎに宿を出た。

そうして村外れまで来てみれば、それが視界に入る。

「この村の規模にしてはでかいな」

「ええ・・・まあどうせ、信者からかき集めたお金でしょうけどね」

目の前に立つ教会は、確かに辺境の村に建つにしては大きな規模だった。

大方、大きさを財力や権威を誇示しようとしたところだろう。

まあ、大きかろうが小さかろうが、やる事は同じなのだけど。

私は大抵同じだが、普段から色々な服を着ているエヴァも、今日は本気で私と同じ服装をしている。

神様から貰ったブーツ・ホットパンツ・ブラウス・ローブ・マント。

左に腰には短刀とクライスト。右の腰には短杖。

エヴァも左腰にクライストを差し、2人揃ってマントを翻し悠々と歩く。

その2人の左手薬指には指輪が光る。

ここに来るまで、村人の視線をかなり受けた。

全身黒に身を包んだ美女2人。視線を集めない訳ではないが理由は別にある。

黒い物を着る・猫を飼う・不審な行動をする。

魔女狩りの時代に避けられた行動の1つだからだ。

昨夜は夜で酒場という事でそれほどでもなかったが、昼間に堂々と着ればさすがに注目を浴びる。

そんな些細なことで魔女とされ処刑されたのが魔女狩りの時代なのだから。

この村でもその空気はしっかり根づいてしまっている。

・・・やはり、決まりね。

マスターの話でほぼ100%だったのが、ここまでの道中でより確信となる。

「おい、お出迎えのようだぞ」

「そのようね」

教会を視界に入れてから少し歩くと、向こうもこちらを視認したように、視線を向けてくる。

教会の入り口に立っているのは男2人。革の鎧に長剣。賊か傭兵か、見分けがつかないような風貌だ。

まあ、美女2人をにやけた顔で見ているのも主要原因かもしれない。

男達が口を開く前に、小さく魔法を唱える。

「『コンフユ』」

効果が出たのか、一瞬2人の男の視線から光が消え無意識のように見える。

次の瞬間には元に戻り口を開く。

「なんだあ、姉ちゃんたち？何か用か？」

「司祭様ならそろそろお勤めの時間だから会えないぞ」

にやにやと話す男2人。『お勤め』の言葉にエヴァがぴくりと反応する。

「私達、義姉妹で旅をしているの。ここには旅の安全を祈りに来たのよ。それより・・・お勤めつてもしかして魔女絡みかしら？」

「ああ。今ごろ魔女共を自白させるために、司祭様がんばってい

るだらうよ」

「自由って事は・・・やっぱり拷問とかするのかしら？」

「ああ・・・まあそういう事をするときも有るけどな」

「司祭様は慈悲深いからな・・・鞭だけでなく飴も与えて罪を認めさせようとなさるのさ」

「飴？」

「男と女でする気持ちいい事さ」

そこまで言つと、下衆共のにやにやとした笑いが更に酷くなる。

「魔女なんて所詮家畜さ。そんな奴らにわざわざ飴を与えて自ら罪を認めさせようなんて・・・司祭様は本当に慈悲深い」

「ああ、まったくだ。昨日は俺たちも、神の名の下その下僕としてお勤めを手伝ったんだぜ。いやあ、大変だった」

そこまで言えば昨夜の事を思い出したのか更に笑いはじめる。

私は片方の男の目の前に立つ。

「ん？どうした？」

「ありがとう。いい話を聞けたわ・・・死んで頂戴」

「は？」

ザシュツ！・・・ゴロン・・・ドサツ！

微笑みかけながら宣告すると、私は迷いなくクライストを抜き、一太刀で下衆の首を斬りおとす。

すぐに隣でも同じ音がして、視線を向ければエヴァがクライストを一振りし血を払っている。

「あの魔法は？」

「私だけが使えるFF魔法の一種よ。相手を混乱させて、認識を誘導する魔法」

「認識疎外じゃだめだったのか？」

「あれは広範囲・大多数向けなもの。それに認識を阻害する範囲は個人差が出る。そもそもあれの効果は、あくまで認識をまったくしないか、認識した非現実を常識の範囲内に修正するくらいの力。言いかえれば、認識をOFFにするか、目の当たりにした現実を、掛けられた人間の常識に修正して認識する力よ」

「コンフユと認識阻害、どう違う？」

「あの下衆共にとって私達は、突然現れた女。不審や警戒を感じるのが当然で、彼らの常識には存在していない。そんな奴らに認識阻害を掛けても大して効果はない」

「・・・」

「それに対してコンフュは、相手の認識を直接阻害する。今回は私達に対して好意的な感情を抱くように混乱させたわ。だからあそこまでぺらぺら喋ってくれたのよ」

「認識阻害にそんな落とし穴があったとはな・・・」

「原作の知識のお蔭よ。野営で見つからないように結界として張るとか、その程度なら問題ないけれど」

「昨日の酒場では認識阻害の方を張ったな。対象が多かったからか？」

「それもあるけれど、あの場には酒場の客は酒を飲む、という常識があるのだから問題ないのよ。私達が何をしようとしていようと、その常識に修正されて彼らには私達が酒を飲んでいるようにしか見えないのだから」

「実際はあんなにいちやいちやしていた訳だがな」

「エヴァの可愛い姿は私のものだもの。例えばだけど、平和ボケした時代に認識阻害を多用すれば、その影響下の人間はそれがどんなに危険な行為でも、平和と言う常識に修正、阻害されて躊躇いなく行ったりするわ」

原作の薬味パーティーの多さってこれが原因じゃない？とか思っている。

戦いについて何の心得も無い一般人（何名か除外）が英雄の息子と一緒に行動して、魔法使いは正義とか平気で言っちゃう連中のいる世界に関わるとか、自殺クラスの暴挙としか言えないと思う。

まあ、今回は私が居るのだから、存分に邪魔させてもらってもりだ
けど。

・・・約1名、物語の設定上認識障害が効かないはずの人間が、真
っ先に首突っ込んでいたりするけれど。

出生とか設定とか抜きにしてあれは、あれがどうしようもない馬鹿
だから、と私は認識している。

そして私は、愛すべきバカ以外の馬鹿が嫌い・・・よって彼女は救
わないけどね。

そんな事を話したり考えたりしていると、礼拝堂の扉前に到着。

気と魔力、更には魔眼まで使って気配を探る。

昨日の時点で酒場のマスターに、教会の横暴が始まってから村人は
教会に近づかなくなつたと聞いている。

中に居る気配は100程。

そのほとんどは力にものを言わす荒くれ者の三下の気。

後は後ろ暗い事をしている奴特有の濁り淀んだ気。

「どっする？」

同じく探り終えたのか、エヴァが聞いてくる。

「わかっているでしょう?」

微笑みながら答える。

「Are you ready? (準備はいい?)」

「Of course (もちろん)」

短く問いかければ、ゾクゾクする艶やかな声で答えが紡がれる。

2人は同時に脚を振り上げ………目の前の扉を蹴り飛ばした。

礼拝堂の中に居た下衆共は、吹き飛んできた扉と私達を茫然と見つめる。

そんな奴らに、パーティーの始まりを宣言する。

「Let's rock!!! (派手にブチかませ!!!)」

扉から祭壇に向かう中央の通路。その両脇に座るための長椅子が並

ぶ。

その椅子にばらけて座り、昼間から酒盛りをする下衆共。

扉を蹴破った瞬間、私は右に、エヴァは左に分かれ駆ける。

そこから始まったの戦闘ではなく殺戮。

一番手前に居た5人にクライストを一閃。首を切り裂く。

次の10人の頭上を飛び越しながら、サキタ・マギカ魔法の射手・セリエス・フルゲラーリス雷の20矢を叩きこむ。

見た事もない現象に目を見開きながら、心臓と頭を貫かれた10人は絶命。

制御力に重点を置いたおかげで、無詠唱の魔法の射手でも十分な威力を出せるわ。

この辺りでようやく下衆共も事態を認識して、何かを喚きながら剣を抜き始める。

「このアマあああ！」

「喚く前に手を動かさない！」

喚きながら突っ込んできた猪を、避けざまに腹に一太刀。あっけない。

そのまま更に4人斬り伏せる。これで20人。

視界が開けたなと思ったたら、祭壇の前に並ぶ30人の下衆共。

その手には弓矢が握られ、私に向けて引き絞られている……
……なんて浅はかな連中。

「撃てえええ！」

中央の1人の掛け声で、30の矢が私に殺到する。

私は椅子の合間で、右手にクライストを持ちながら、悠然と佇む。

恐怖か何かで動けないとも思ったのか。避ける動作を見せない私
に下衆共は歓喜の表情を浮かべる。

しかし次の瞬間……

カン！カカカカカン！

マントに付与された防御魔法が、あっさり矢を防ぎ地に落とす。

実際問題、私にダメージを与えるには、マント・ロープ・指輪に付
与された対物対魔の防御魔法、私自身が張っている魔力障壁、計4
つの障壁を突破しなければならぬ。

まあその時点で気と魔力を使い身体強化をしているので、攻撃は通
ってもダメージを受けるかどうかは別問題なのだけど。

そんな訳で起死回生を狙った弓矢が訳も分からず地面に落ちた下衆
共は……顔面蒼白。

だから私は、微笑みながら歌うの。

「ケントウム・ウーヌススピリトゥス・フルグ^{フルグ}イ^イマ^マグ^グテ^テス・サギ^{サギ}テ^テント・イニ^{イニ}ク^クム^ム サギ^{サギ}タ^タ・マ^マギ^ギカ^カ
雷の精霊、101柱、集い来りて敵を射て！魔法の射手・連弾^{セリエス}
フルグ^{フルグ}ラー^{ラー}リス^{リス}
雷の101矢！」

鎮魂歌^{レクイエム}を奏でると、空中に101個の魔力の塊。

見た事もない現象にただ震えるしかない下衆共。

やがてその塊は矢の形状に変化、敵を貫く。

次の瞬間には体を串刺しにされ、雷の熱で体を炭化させた肉塊が30、崩れ落ちた。

回りに誰もいなくなったのでエヴァを探すと、彼女も最後の1人を斬り伏せたようだ。

「終わったか？」

「ええ。全員斬り伏せたの？魔法使えば早かったのに」

「私はシルヴィアほど対多数に慣れていないからな、試しておきたかった」

そんな事を話しながら、剣の血を払い気配を探る。

「あとは地下か・・・」

「そのようね、行きましょ」

残りを片付けるために足早に次に向かう。

「な・・・何なんだ貴様らは！」

地下に降りて最初に見つけたのが、女性たちを捕えておく牢獄。

中には10人の女性が、ほとんど布切れのような服を纏い倒れていた。

「エヴァ・・・頼んだわ」

「ああ・・・」

いざ目の前にすると、沸々と怒りが沸き起こるのを感じる。

所詮赤の他人と割り切ってもこれだけの怒りなのだ。

怒り故に逆に冷めていく私達。牢の女性たちの介抱をエヴァに任せると、最奥の部屋に進む。

中から聞こえる笑い声。内容は心の底からこの魔女狩りを楽しんでいると言つ事、許可したローマを賛美するもの。

扉を蹴破り、教会の服を着た2人を残して斬り殺す。

その数10人。お楽しみの間だったのか部屋の中に女性はいないので、遠慮なく殺戮する。

油断して酒を飲んで騒いでいる下衆10人、斬るのに1分も掛からない。

斬り終わるて部屋を見回せば、用途が一発で分かる拷問部屋。

そうしてへたり込む、着ている服の豪華な装飾からこの教会の司祭であろう下衆の言葉と言つわけだ。

ちなみにもう1人、補佐役の方は部屋に隅で震えている。

「別にあなたが知る必要はないわ・・・ここで死ぬのだから」

剣を4回振る。手首と足首が斬り飛ばされる。

「ぎゃあああああ！やめてくれえええ！」

・・・この言葉でカチンときてしまった私は、両手両足を斬り飛ばしてしまった。

むう、次は肘と膝を斬ろうと思っていたのに。

「ああああつああああ！」

「あの子たちがやめてくれと言って、あなたはやめたのかしら？助けたのかしら？」

もちろん、実際に言ったところを見た訳ではないが、容易に想像はつく。

「あああああああ！」

「素直に答えれば命だけは考えてあげる。どうしてあんなことを？」

「ローマの友人に聞いた！教会が後ろ盾になってくれると！カトリック教会じゃどこでもやっている！」

予想通りの答えを喚き散らす下衆。

「そう・・・ならもういいわ。死になさい」

「ま、待ってくれ！助けてくれると・・・」

「考える、と言ったのよ。そして考えた結果・・・あなたは死ぬべき下衆よ」

冷たく見下ろしながら、一閃。あっさり斬り落とす。

「さあ。あなたにはまだやってもらうことがある」

そうして1人残った補佐役を立たせると、後ろ手に手枷を嵌め部屋を出る。

「エヴァ、どう?」

「肉体的な傷は治療した・・・だがそれ以上は私には無理だ」

「そっちは任せて」

短く会話し、下衆をエヴァに任すと1人ずつ治療する。

『エスナ』

本来なら状態異常を治すこの魔法は、精神的な傷を治す事も可能になっている。

女性にとって襲われた、犯されたという事実は一生ものの傷として残り続ける。

その事実を消し去ることはできないが、本来数年・数十年懸けてようやく、過去の一事実として受け止められるかどうかという時点まで、癒す事ができる。

少なくともフラッシュバックで苦しんだり、男性恐怖症になったり・・・という事は限りなく0に近いはずだ。

「シルヴィア、リュックを出してくれ」

全員の治療を終えると、エヴァがそう言うってくる。

「どづしたの?」

「洋服袋の服を着せたい・・・このまま外に出す訳にもいかないだ

ろう」

言われてみればその通り、彼女たちは殆ど裸に近い状態なのだ。

「それじゃあエヴァはこのまま彼女たちの介抱をして落ち着いたら外へ。私はこいつに案内させて、溜めこんだ食糧と財宝を表へ運ぶわ」

「ああ、分かった」

空だった4つ目の小分け袋を出すとリュックをエヴァに渡し打ち合わせ、下衆を促し作業を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1012y/>

吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

2011年11月24日02時51分発行